
IS インフィニットストラトス 自由の大天使 運命の墮天使

白銀の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス 自由の大天使 運命の墮天使

【Nコード】

N1976U

【作者名】

白銀の翼

【あらすじ】

メサイア攻防戦から1年、ザフト軍の隊長兼特務隊”FAITH”の一員となったキラ・ヤマトは、部下であり、また友でもあるシン・アスカと共に、ロゴスが海賊行為を行っているというデブリ帯へと愛機を携えて出撃していくが、ある異常重力によって行方不明になってしまう。目が覚めた時、自分達がいた場所は、女尊男卑の風潮がある世界だった。

ブローグ

デブリ帯^{ベルト}

無数の岩塊や戦艦、モビルスーツの残骸が浮いている漆黒の空間の中、二機のモビルスーツが辺りを見渡していた。

一機は白く輝く四肢にボディは黒と青のツートンカラー、黄金に輝く関節と手、その両手に二挺の白い高エネルギービームライフルを握っており、背中には八枚の深蒼の翼を背負っている。

もう一機は白灰色の四肢にボディは青と赤のツートンカラー、両肩には白いビームブーメランを装備しており、右背面には巨大なレーザー対艦刀を、左背面には巨大な砲身を装備している、張った紅い翼を背中に背負っている。

前者は”自由”の翼を背負う大天使『ZGMF-X20A』ストライクフリーダム』

後者は乗り手の”運命”を変える墮天使『ZGMF-X42S』デスティニー』である。

”デスティニー”のコックピット内で、パイロットであるシン・アスカがぼつりとつぶやく。

「おかしいな……」。

確かにここで”ロゴス”の残党が海賊行為を行っているって聞いたのに、何故こうも何も痕跡が残されていないんだ？」

その呟きに”ストライクフリーダム”のパイロットであるキラ・ヤ

マトが合いの手を入れる。

「確かに。」

通常だったら、何かしらのデータがある筈なのに、何故こうも何も無いんだ？」

二人が出す独白を詳しくすると、こんな感じである。

ザフト月軌道艦隊が、地球連合軍 正確にはロゴスの残党 がこのデブリ帯で何やら怪しい行動をしていると、連絡が入った。

それにザフト軍の隊長格兼特務隊” F A I T H ”^{フェイス}を任されたキラと同じく” F A I T H ”に入隊した部下であり、友達であるシンと共に自分達の愛機に乗り” F A I T H ”の権限でザフト月軌道艦隊 正確には” ミネルバ ” から出撃してきたのだ。

結果は蛻の殻である。

だが、その蛻の殻と言っても余りにも鮮やか過ぎる。

通常、強大であるザフト月軌道艦隊、更に前大戦で大いなる活躍をした” ミネルバ ”、更にザフトでも最強と名高い” ストライクフリードーム ”、” デステイニー ” が出撃してきたとなると大抵の組織は我先に逃げていく。

その際、何かしら機密データや何かの証拠を残していく筈なのだが、それが全く無いのだ。

まるで、最初からそこにいなかったように。

「どうします？
キラさん」

「そうだね……。
一先ず、もう少し調べてみようよ。
何か解るかも知れない」

「了解です」

そう言つて、お互いに操縦桿スティックを動かした時だった。

突然、二人のコックピットの中に警告音アラートが響き渡った。

「っ……これは！？」

「解らない！
いきなり、重力が　！」

そして、キラとシンは見てしまった。

また、感じてしまった。

あるはずも無い空間に不気味な裂け目が出来ているのを。
更にその裂け目から、異常なまでの重力が発生し二人を、機体を吸い込もうとしているのを。

「き、キラさん、あれは一体！？」

「解らない！」

くっ、操縦桿も動かない!!」

更には機体の全てのシステムがダウンしてしまった。

ハッチも開かない。武器も使えない。ブースターも使えない。

まさに絶体絶命だ。

そして、二機は裂け目に吸い込まれていった……。

巡り会う時

IS学園

特殊なパワードスーツ、インフィニットストラトス ISの操縦者候補を養成する施設である。

そんな特殊な学園の職員室で、二人の女性教師が談笑をしていた。

一人は長めの黒髪に、黒いスーツと同色のタイトスカートを穿いている、鋭い目つきをした女性。

もう一人は緑のショートカットに、黄色いワンピースを着た眼鏡をかけた女性。

前者の女性は織斑 千冬。

後者の女性は山田 真耶である。

「織斑先生。

この前のニュース、見ましたか？」

「この前のニュース？

ああ、あれですか」

二人が言っているこの前のニュース、というのは男性が動かせる筈の無い、ISを動かしたという事である。

IS、というのは十年前に篠ノ乃 東によって開発されたモノである。

現代兵器の性能を著しく上回る力とスペックを持つが、ある致命的な欠陥がある。

何故か女性にしか反応しない、という所だ。

ISは女性にしか反応しない、操縦出来ない。

国防の要はIS、つまり女性という事で世界各国は次々と女性優遇政策を取り、世界は男尊女卑と男女平等から、一気に女尊男卑の風潮となった。

そのISを男性が動かしたという事は周囲に凄まじい衝撃を与え、そして新たなる旋風を巻き起こす事になった。

「でも、何で動かせたんでしょ？」

やっぱり織斑先生の弟さんだからでしょうか？」

「嫌、それは無い」

真耶の疑問を、千冬は即答で切り捨てる。

姉でISを動かせて、弟がいる所はこの世界には「ゴマン」といるが、動かせる男性は今回が初めてだ。

ましてやそれでは今頃こんな大騒ぎになる筈なんてないのだ。

「確かに、それもそうですね」

真耶が納得したように頷いた時だった。

「第三アリーナにて侵入者発見！
第三アリーナにて侵入者発見！
当直の先生方は至急現場に向かわれたし！
繰り返す」

その放送を聞いた瞬間、二人の顔から笑みが消え、代わりに戦士の表情になる。

「行くぞ。山田先生」

「はい！」

それ以上の会話は、必要無かった。

第三アリーナ上空に着いた二人は、ISを装着したまま着地すると、その侵入者に近付いた。

千冬が装着しているのは純国産の第二世代型、“打鉄”、真耶が装着しているのはフランス産の第二世代型、“ラファール・リヴァイヴ”である。

侵入者に近付くが、倒れたままピクリとも動かない。

どうやら気絶しているようだ。

「何かの、パイロットスーツでしょうか？」

「解らない。」

何処かに名前や所属しているのがあれば良いが……」

千冬は青いパイロットスーツとヘルメットを着た侵入者に、真耶は赤いパイロットスーツとヘルメットを着た侵入者に向かい、ヘルメットを取ろうとするが、ロックに阻まれて取れない。

が、二人は首の部分にあるロックを見つけると腕部の装甲を解除して、ロックの取り外しにかかった。

ISの装甲は人間の手と比べてかなり大きい。

細かい作業をする際は生身の手の方が効率的なのだ。

「ん……あれ？」

これを……うーん……」

「……（これをこうして、取れた）……」

真耶は何とか、千冬はすぐにロックを外して侵入者の素顔を見遣る。

青い侵入者は茶髪ショートシャギーの髪型、血色の良い肌、瞼が閉じられているが、それでも紳士系の美形青年というのが解る。

赤い侵入者は癖のある漆黒の髪に白が強い肌、こちらも瞼で瞳が見えないが、こちらは強気系の美形少年だというのが解る。

千冬と真耶の瞳が、ヘルメットの内部にある一文に止まる。

「ザフト軍、ヤマト隊。

キラ・ヤマト……」

(ザフト軍？聞いた事の無い軍だな……)」

「織斑先生。

こっちの少年のはザフト軍、ヤマト隊のシン・アスカとありました」

「どうやら、二人は同じ隊のよう」

だな、と続けた時だった。

キラ・ヤマトという青年の胸元に、菱形の形をしたサファイア、その中に金色の十字架を埋め込まれたペンダントが千冬の瞳に映った。

「これは、もしか　！？」

「お、織斑先生！

このアスカ君に　！」

少しは静かにしてくれ、と言いつうになつた千冬だが、真耶が持っているモノを見て絶句した。

真耶が右手に持っているのは赤い羽根を象つたイヤークラス。

これが意味しているのは　。

インフィニットストラトス
「IS、だな……」

「で、ですがこんなIS。

見た事も聞いた事も無いですよ!？」

真耶が叫ぶのも解る。

ISはまだその全容は明らかにされてはいない。

特にコアはこの世に置いては篠ノ之 束しか造る事が出来ない。

コアは第二形態セカンドソフト移行の際、自己進化の事以外はブラックボックス化されている為、ロストテクノロジー扱いだ。

更にISの絶対数は467機。

絶対に増えたり減ったりする事はない。

この二人の持っているのはノーナンバー、つまり篠ノ之 束が開発したモノではないモノだという事だ。

「とりあえず、山田先生は最高機密室でこのISの解析を。
私はこの二人を医務室へ運ぶ」

「は、はい!」

千冬からの指示を承ると、真耶はキラのペンダントとシンのイヤークラスを受け取り、真っ直ぐその最高機密室に向かっていた。

「やっ……」

残された千冬は、未だに目を覚まさない二人を見遣る。

その双眸は教師の目ではなく、寧ろ数多の死線をくぐり抜けてきた歴戦の戦士の目だ。

「せめて私の胃に穴を開けてくれるなよ……」

千冬はそう嘯くと、二人を抱えて医務室の方に向かっていった。

最高機密室。

IS学園地下五十メートルの所にあり、レベル4権限を持つ者しか入る事が許されない部屋である。

そこに、ペンダントとイヤークラス、待機状態となった”ストライクフリーダム”と”デステイニー”が解析されていた。

が、

「……あれ？

おかしい……。また……」

解析をしていた真耶が、困惑の声を出す。

投影された解析画面には、解析不能の四文字が映し出されている。

「ISなのに、何で解析出来ないんでしょう？」

しかも何回か逆ハックされかけましたし……」

「山田先生。解析は？」

そこへ、侵入者二人を医務室に連れて行った千冬がやって来た。

「織斑先生。

実は、解析しようとしても出来ないんです……」。

解析出来たのは”ストライクフリーダム”と”デステイニー”という名前だけでして……」

「……どういう事だ？」

名前しか解析出来ないIS。

未だ解明されていない謎が多いとはいえ、解析出来ない、更に逆にハッキングされかけるのは見た事も無ければ聞いた事も無い。

それを無しにしてもIS学園はISに関してはかなり高い技術と知識を持っているが、機体の名前しか解析が出来ない上に逆にハッキングされるとは、一体どういう見なのか。

宿っている意志が、それを拒んでいるとも言っのだろうか。

ともかく、解らないとなると。

「彼等に聞いてみるか……。あれがISなら、あの二人と機体についての事は上と国際IS委員会と学園上層部に知らせた方が良いな」

「そうですね……」

千冬と真耶は、ペンダントとイヤークラスを取ると部屋から出て行った。

医務室

「ん……うう……。」

「ここは？」

「大丈夫？シン」

呻きながら起き上がるシンの耳に、キラの心配そうな声が入り込む。

声のした方を向くと、キラが隣のベッドに腰かけていた。

服はパイロットスーツではなく、患者が着ていそうな白い服だ。

「キラさん……。」

「ここは？」

「解らない。」

何処かの組織か機関の医務室というのは解るけど、あの異常重力に引っ張られた後の記憶がない」

「そう、ですか……。」

「そういえば、”フリーダム”と”デスティニー”は？」

シンの心配も解る。

が、キラは苦しげな顔で絶望的な答えを出す。

「”フリーダム”と”デスティニー”の行方、所在も解らない。

ドアには鍵が掛けられているし、窓も高すぎる。

更に監視カメラもあるから、ここから出られない……。」

シンはその答えを聞くと絶句した。

訳も解らない組織や機関に機体の技術を抜き取られ、将又処分されるのかも知れないのに、自分達は何も出来ないのか。

シンは今では亡きデュランダルとレイから違う未来を託され、またキラ達と一緒に花を植えていくと誓った。

キラは愛する女性むすめを守り、またその大切な物ものをシン達と共に守っていくと誓った。

それなのに、自分達は何と無力なのだろうか。

「オレ達、これからどうなるんでしょうか……?」

「とりあえず、相手の出方次第だね。」

後手後手だけど、本当に動く手段が無いから」

それが、隊長と特務隊”FAITH”を兼任された青年の答えだっ

た。

相互解釈

キラとシンは、未だに窓の外を眺めていた。

空は既に夕方なのか、茜色から紺碧に変わろうとしている。

空に鬱すらと見える筈の”プラント”が見えない。

それが余計に、寂しさを増させていた。

「お金も無い。戸籍も無い。居場所も無い。

本当に、何もありませんね……。」

オレ達……。」

「うん。

ここまで何も無いといっそ清々しいよね。

僕達はこれから、どうなるんだろう?。」

「そうですね……。」

その時、医務室の扉が開かれるが二人の耳に飛び込んできた。

慌てて振り返る二人の視界に入ったのは、黒いスーツを着た黒髪の女性と、黄色いワンピースを着た緑の髪の女性だ。

「目が覚めたようだな」

「貴女方は?。」

「……………」

いきなり入ってきた女性二人に、キラは平常心のまま聞くが、シンは警戒心剥き出しにしたまま二人の行動を見る。

「安心しろ。」

何も君達を取って食おうとは考えてはいない。

私は織斑 千冬。

ここ、IS学園の教師だ」

「お、同じくIS学園教師の山田 真耶でしゅ！」

何とまあ対照的な二人だが、千冬から出た一言を、キラとシンは聞き逃さなかった。

どうやらここは、IS学園という教育機関らしい。

だがこれ程の規模を持つ教育機関は見た事がない。

”ヘリオポリス”の工業カレッジか、ザフトの士官学校アカデミーよりも規模が大きい。

それ以前に二人が自己紹介をしたのだから、キラとシンもある程度の警戒心を消してザフト式の敬礼をしながら自己紹介をした。

「自分は、ザフト軍ヤマト隊隊長兼国家元首最高評議会議長直属の特務隊”FAITH”所属、キラ・ヤマトです」

「同じく、自分はザフト軍ヤマト隊所属兼国家元首直属の特務隊所属のシン・アスカです！」

「ほう。」

本当に軍人だな。

敬礼が様になっている」

「そうですね」

「は、はあ……」

「どうも……」

女性教師二人からの称賛を聞いた二人は、生返事で返すと、千冬は突如として鋭い目線で聞いてきた。

「さて、こちらからの質問は二つ。達に私達に敵対心を抱いているのか。

君達は何処からここへ侵入してきたのか。

この二つだ」

「貴女方に対する敵意は持っておりません。

任務で異常重力に巻き込まれて気付いたらここにいました」

「本当だな？」

「はい」

千冬の鋭い目線とキラの涼やかな、シンの強気な目線が絡み合う。

触れれば斬れる空気の鋭さに、真耶はオロオロしているが、華麗にスルーである。

「ふむ。」

嘘はついていないようだな。

まだ何か隠しているようだが、まあ、気にしないでおこつ

「ありがとうございます」

「なあに、重要そうな隠し事は聞かないだけさ」

場の空気が一気に軽いモノに変わった事で、キラ、シン、千冬の纏っていた雰囲気も変わる。

「あ〜〜。」

ヤマトさんとシンさんは先程にザフトの軍人と仰りましたが、そのザフトという軍隊は何なのですか？

そして二人は何歳なのですか？」

真耶がふとそんな事を聞いてきた。

ザフトという見た事も聞いた事も無い軍に興味を示すのは解るが、二人の年齢を聞くのは流石にどうかと思う。

その答えと言えば、キラとシンの二人は、容姿から見て軍の隊長と元首直属の特務隊、というには余りにも若すぎるからである。

「まあ、ザフト軍の事を説明するには、まず僕等の事を説明します」

「はい。」

ザフトというのは 「ここで二人の説明が始まった。

西暦ではなく、C・Eコスミック・イラという年号を用いている地球、簡単な歴史、技術、ザフトの事等を。

「今僕等が説明出来るのは、大体はこれくらいです」

「そうか。」

なら、こっちも話さなければな」

千冬と真耶も、この世界に置ける説明を始めた。

篠ノ之 束という科学者が開発、発表したISという究極の機動兵器の事、その科学者の突然の失踪、更にそのISを扱えるの女性のみで、女尊男卑の風潮になった事、そのスペックで兵器からスポーツへの転用になった事、つい最近になって世界初ISを操れる男性が現れた事を話した。

「女性にしか操れない兵器。」

しかもその開発者は失踪して行方不明……。

その博士は何がしたかったんだ？

ただ世界を混乱させたかったのか？」

「さあ、ね……。」

だけど、ただ女性のみには操れるからと言って、それだけで差別するのはどうか？

力の使い方を間違っている様にも聞こえる」

「力を手にした瞬間から、自分は誰かを泣かせる者になる、ですよ
ね？」

「うん」

世界レベルの迷子の感想を聞いた千冬と真耶は、それを聞いて啞然とした。

二人には解ってしまったのだ。

この二人はかなり厳しい現実や残酷な運命の中で自分の信念を曲げずに戦ってきた軍人であると同時に戦士なのだ。

そして、かなり厳しい戦争を経験してきた兵だつわものと。

「そういえば、”フリーダム”と”デステイニー”は、一体？」

「”フリーダム”？”デステイニー”？」

ああ、それならISになった」

「「……………へ？」」

自分達の愛機がいきなりISになったと告げられれば、まあ当然と言えば当然の反応である。

その反応に、千冬が苦笑する。

「まあ、信じられない気持ちも解るが……………。
山田先生」

「は、はいっ」

後ろに控えていた真耶が、二人の前に出て持っていた箱の蓋を開けた。

中には金の十字架が埋め込まれたサファイアのペンダント、紅い羽根を象ったイヤークラスが入っていた。

「これは？」

「ストライクフリーダム」と「デステイニー」だ。解析をしようとしたが、名前だけしか出来なかった」

ほう、と頷く二人だが、問題はそこではない。

「織斑先生。

確か、ISって女性にしか操れないんじゃない？」

「ああ、アスカの言う通りだ。

だがこの間世界初の男性操縦者が現れたんだ。今日はもう疲れただろう？」

ISのデータ取りや基本操縦等は明日の午前9時からするから、遅れるなよ」

そう言つて、千冬は真耶を連れて医務室から出て行った。

勿論、鍵をかける事も忘れずに。

「ま、まさか”フリーダム”と”デステイニー”がISになるなんて……」

「う、うん……。」

何だか、明日から嫌な予感がするな……」

残された一人の乾いた声が、医務室の空気の中に消えていった。

相互解釈（後書き）

”ストライクフリーダム”と”デステイニー”の単一仕様技能何に
しまししょうか？
ワンオフ・アビリティ

墮天使の実力（前書き）

何回もすみません。

シンとキラに分けます

墮天使の実力

翌朝

医務室の東向きの窓からは爽やかな朝の陽気が光の粒となって医務室内を優しく照らす。

その中、既に起床したキラとシンが窓を開ける事によって、中の空間を支配している空気が朝特有の爽やかな空気になっていく。

だが、朝日に照らされる二人の顔は僅かながらに暗い。

「やっぱり、夢じゃないんだ……」

「そうだね。」

皆、心配してるだろうな……」

二人の頭の中に浮かぶのは、嘗て共にあの戦場を駆けて行き、刃や砲火を交え、沢山喧嘩した仲間、愛する人達の顔だ。

アスラン、ラクス、カガリ、イザーク、ディアッカ、バルトフェルド、ルナマリア、ムウ、マリユール、アーサー、今は亡きデュランダール、レイ、タリア等の顔が浮かんでは消えていく。

スーパーコーディネイター、コーディネイターと言えども望郷の念はある。

だからこそ、今ここにいない仲間達が頭に思い浮かんだのだ。

だが、それもすぐに崩された。

鍵を開ける音と同情に、千冬が入ってきたのだ。

「起きていたか」

「はい」

二人は振り向かず窓の方を見たまま答える。

「まず、国際IS委員会からの通達だ。

まず、君達はここIS学園に入学して貰う。

学費、生活費等は免除。

国からの支給が出る」

それを聞いたキラとシンは、苦虫を十匹程噛み潰したような表情になった。

これ程良い話には、必ず裏が存在するからだ。

それと同時に、自分達がこの世界からどのような目で見られているか、というのをも。

「その見返りは？」

僕達の境遇が哀れだと思ってそんな事をする筈はない。

更にここはISを起動させる為とその候補者を育てる為の学園であり、また女子校。

恐らくは学園も貴重な僕達の存在を確保したい、という思惑でしょう」

「更にはその男のデータ収集、研究。

解析出来なかったISとなった”デステイニー”と”フリーダム”のデータ取りは確実に行われるでしょう」

「ふむ。

流石は軍の隊長と特務隊と言つべきだな」

感心する千冬だが、これからが本題なのか、表情を引き締める。

「奥深くを言うと、君達は男性でISを操れて、更に解析が出来ない機体を持っている。

勿論、国家や企業が君達の存在は見逃さない。

そこで、IS^{（イシ）}学園と日本政府は自由国籍権、まあ何処の国籍を取つても良い権利を与える事で、戦争回避を図つた、という事だ」

これではまるで危険人物扱いではないか。とシンは激昂しそうになったが、流石にここで暴力沙汰等を起こしてもどうにもならない。

確かに、”ストライクフリーダム”と”デステイニー”はモバイルスーツの状態でも複数の国家と渡り合う事が出来る。

しかし、ISになったからと言ってそこまで危険視する必要は解らない。

個人がそう思つてなくとも、国家がそれに二つ返事で信用する程甘くないのだ。

千冬は苦い顔をしながら更に続ける。

「だが、世界各国が日本に反発してな。

それで不本意だが、君達の処遇を決める事になった。
ここまでで異論は？」

「いえ、異論はありません」

「反発した所でどうにもなりませんから」

「よし。ではこれからISの起動訓練を行う。
が、その前にこれに着替える」

と、千冬が何処からか二つの風呂敷を出してきた。

「「？」」

開くと中には、ザフトのエリートのみ着用する事が許される赤服と
隊長のみが着用する事が許される白服が綺麗に畳まれた状態であっ
た。しかもご丁寧に”FAITH”の徽章までもある。

「これは……」

「君達と一緒に落ちてきた物だ。
しかし、何だ？」

君達は任務の時はこの制服も持っていつているのか？」

「いえ、キラさん。」

オレ達、パイロットスーツを着てすぐに出撃しましたよね？」

「うん。」

確かにロッカーのハンガーに架けた筈なんだけど……」

うーんと思い出すが、ちゃんとロッカーでスーツに着替えた後、機体を立ち上げて発進していった筈。

だが何故着替えた筈の赤服や白服があるのかが解らない。

だが今そんな事を考えていても仕方がない。

「まあ、パイロットスーツや今のその服のままでも悪いだろう。後ろを見ておくから、今着替える」

千冬はそう言うと、後ろを向いた。

今の内に着替える、という意味だ。

キラとシンはそれぞれ、赤服と白服を今着ている白い服の上に着始めた。

ズボンを穿いてはファスナーを閉じて、黒い長ブーツと白い長ブーツを履き、最後に“FAITH”の徽章を左の鎖骨らへんに付けて完成。

「着ました」

「こっちもです」

「よし、ならついて来い。

”ストライクフリーダム”と”デスティニー”は向こうで渡す」

「はい」

キラとシンは、千冬の案内で医務室から訓練所に向かって行った。

第三アリーナ。

アリーナのピットに着いたキラとシンは格納庫に、千冬と真耶は管制室にいた。

キラの首元には、黄金の十字架が埋め込まれたサファイアのペンダント、シンの左耳には紅い羽根が象られたイヤークラスが付けられている。

待機状態の”ストライクフリーダム”と”デステイニー”だ。

「これより、ISの起動を行う。装着する時は、念じるようにすれば自動的に装着される。やってみる」

「はい」

言われて二人は目を閉じ、念じてみると二人の脳裏に情報が流れ込んできた。

「やっぱりこれは”フリーダム”だ……。
操縦方法や兵装さえも変わってない。

変わってる所と言えばドラグーンが大気圏内でも射出出来る所とビームサーベルが実剣やエネルギー刃と鏢競り合いが出来る所と単一

仕様能力が　　かな……」

「こつちも”デステイニー”と何ら変わってない……。
変わってる、と言えばキラさんと同じように”アロンドイト”がビ
ームサーベルや実剣と鏢競り合いが出来る所と単一仕様能力？が
、くらいか……？」

千冬と真耶は既に管制室にいる為、二人の咳きは聞こえない。

特に単一仕様能力の部分ワンオフアビリティが上手く聞き取る事が出来なかつたらしい。

そう呟いた瞬間、二人の体が光に包まれた。

首元と耳から全身にかけて薄い膜が広がっていき、約0・3秒の展
開時間。

光の粒子が解放されるように、そして集まっていく。

体が軽くなるような感覚に捕われ、各センサーが意識と繋がり世界
が広がっていく。

瞬きするだけの時間、それだけの時間に二人の体は鉄灰色の装甲に
覆われていた。

顔面だけを残した全身装甲フルスキン型のIS。

ディアクティブモードとなった”ストライクフリーダム”と”デス
テイニー”だ。

「ふわぁ……！！！」

「ほう……」

管制室で驚愕している教師組を尻目に、二人の目の前にあるウィンドウが映る。

「Generation
Unsubdued
Nuclear
Drive
Assault
Module」

「Gunnery
United
Nuclear
Deuteron
Advanced
Maneuver」

「CPG設定完了。ニューラルリンケージイオン濃度正常。
メタ運動野パラメータ更新。

原子炉臨界。

パワーフロー正常。

全システムオールグリーン。

”ストライクフリーダム”、”デステイニー”、システム起動、発
進準備完了」

起動が完了した。

後は発進許可を貰い、飛び立つだけだ。

「起動が完了したら、アスカ。先に発進して暫く待機だ。直に対戦相手が来る」

「はい！」

どうやら実戦でISに慣れるという奴だろう。

シンはキラの方を見遣ると、彼が敬愛する隊長は相変わらずの優し
いが力強さを秘めた眼差しで見ている。

その眼差しを軽く会釈して返すと、シンはカタパルトまで歩みを進
めて足を固定する。

「進路クリアー、システムオールグリーン。」

カタパルトの権限をアスカ君に譲渡。

アスカ君、発進どうぞ！」

「シン・アスカ。

” デステイニー ”、行きます！」

勢い良く外界へと飛び出したシンは、バレルロールをしながらV P ヴァリアブルフェ
イスシフト
S 装甲を展開、機体の色を白灰、赤、青に変化させて更にウィング
から光の翼 ” ヴォワチュール・リュミエール ” と ” ミラージユコ
ロイド ” を発生させながら空中停止させた。

「ま、まさか初めてISを起動させてあんなに完璧な歩行、更には
あんなに鮮やかなバレルロール上昇をやったのけるなんて……」

「"デステイニー"の機体の限界や性能、その他全てを熟知している証拠だ。
しかし、ヤマトのは大天使に見えるがアスカのは何処か墮天使に見えるな……」

確かに"デステイニー"の張り上げた十枚の紅い翼、更にそこから発生している光の翼、そして機体と体から発する覇気は何処かしら墮天使を連想させる。

対して"ストライクフリーダム"は未だに鉄灰色のままだがその佇まいから大天使を連想させている。

「(恐らく、ヤマトも同じ事が可能だな。

あの様子を見ても、全く同じではない。

まるで当然な物を見ているようだ)

アスカ、地上に降りて暫く待っている」

「了解！」

指令を受けたシンは地上に降りて、暫く待機する事にした。

ただし地上には足を付けておらず、地上から5ミリの所で浮遊している。

待つこと数秒。

キイイーン！

「あわわわわ〜！！！！！！！！」

「ん？　げっ！？」

上空で何かは空気を切り裂きながら飛来してくる独特の音と叫び声が耳に入り、シンはその方向を向いた。

そこには、慣性で回転しながらこっちに向かって飛んで来ている、“ラファール・リヴァイヴ”に乗った真耶が。

しかもシンの方向に向かって来ている。

周りには誰もいないので、回避や防御は出来なくはない。

だが、そうした所で真耶はどうなる？

今のシンとキラは、ISを動かせるとは言っても、そのISについての知識は殆ど皆無と言っても良い。

なら　！

シンは翼を広げ、ブースターを全力で噴かせると、回転している真耶の腕を軽く握った。

慣性で”デステイニー”も少し回転してしまっただが、シンは冷静に機体を制御して着地。

「す、すいません。
アスカ君」

「い、いえ。」

山田先生は大丈夫ですか？」

「は、はい！」

全然大丈夫です！」

なら大丈夫だ。

シンはゆっくり手を離すと真耶から少し離れる。

まさか、対戦相手というのは。

「そのまさかだ。」

山田先生がアスカの対戦相手だ」

やっぱりシンが思った通りである。

「山田先生が乗っているISは”ラファール・リヴァイヴ”。

フランスで作られたISで射撃、格闘、防御に優れた汎用機だ。
胸を借りるつもりで行け」

「はい！」

「山田先生。」

相手が初心者だからと言って手加減は無用だ」

「は、はい……」

どうやら、二人とも手加減はしないようだ。

「では、両者規定の場所へ」

言われて二人は規定された位置へ移動し、真耶は両手にライフルを、シンは右手に高エネルギービームライフルを構える。

「これよりシン・アスカ対山田 真耶の実戦を始める。
では、始め！」

戦いのブザーがなった瞬間、二人は動いた。

真耶は両手に構えたライフルを矢継ぎ早に放つが、シンは^{ミラーシユネコロオウチユール}「デステ
イニー^{リユミキル}」のウイングから光の翼を発生させて作り出した幻影と高速
機動で翻弄していく。

因みにこれは瞬間加速ではない。
^{イグニッションブースト}

あくまでも通常の機動なのだがそれでもイグニッションブーストと
同等のスピードだ。

幻影と、お釣りが出る程の速さで幻影にしか当たらないのだ。

「くっ！！」

ならばと思ったのか、真耶は両手のライフルを消して近接ブレード
を展開し、斬り掛かってきた。

それに対して、シンは全く慌てる事なく、ライフルから一発の翡翠の光弾^{ビーム}を発射した。

「っー！」

真耶は右に身を翻す事で躲すが、腹部に光の弾丸を喰らった。

シールドエネルギーが、この一発で約四分の一近く失われる。

「くっ！」

牽制射撃と本命射撃。

射撃に置いては基本中の基本だが、それを反動のないビームライフルで遣って退ける。

これは演習なので、別に負けても大丈夫なのだが、彼女はそれを完全に忘れてるらしい。

幾つもの牽制射撃と本命射撃を放つシンに、ダメージ覚悟で正確な射撃を掻い潜っていく。

シンはライフルをリアスカートに納めると、右背面に手を伸ばし、近接ブレードと化したレーザー対艦刀”アロндаイト”を抜き放って応戦した。

ビーム刃と実剣がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

「っ……っ！」

「でえあああー!!」
叫び声と共に重なった刃を跳ね退け、シンは”アロンダイト”のを
逆手に握ると、左手の掌低に青白い粒子を宿らせる。

両手の掌低に仕込まれた武装である”パルマフィオキーナ”だ。

「これはっ!?!」

驚愕する真耶。

ビームのたった一発で、四分の一のシールドエネルギーを消費した
のだ。

あれを喰らうと絶対防御が発動する、という事が体が、本能が警鐘
を鳴らしている。

だが、真耶の体は凍ってしまったかのように動かない。

否、動けない。

体が、言う事を聞かない。

「喰らえええ!!」

そして、真耶の腹部 正確には水月 に”パルマフィオキーナ”が
叩き込まれた。

絶対防御が発動したのか、それとも元々の威力が高かったのかは定
かではないが、ただでさえ減っていたシールドエネルギーがドンド
ン減っていき、エンプティーと表示される。

「山田 真耶。」

シールドエネルギーエンプティーによりシン・アスカの勝利！」

「ふう、実戦演習なのに白熱しちゃいました。どうでしたか？」

初めてのIS操縦の方は」

「いえ、モビルスーツの操縦と勝手が違いすぎなのにここまで動けたのは正直驚いています」

負けた事を全く引きずろうとしない真耶に、シンは素直な気持ちを述べる。

モビルスーツの操縦にかけては世界最強の一角を担うシンだが、愛デステ機がISになったの初めての戦闘に、驚かなかったと言えば嘘になる。

だが、それでいてあそこまで動けたのに驚かなかった、と言っても嘘になる。

第三者から見れば本当に初めて？と聞かれるが、本当に初めてである。

「じゃあ、次はヤマト君の番ですね。

私達はピットに行きましょう」

「はい」

ISはシールドエネルギーが尽きたら動けないのか、真耶はシンに

装甲に包まれた右手を指し伸ばすとシンはその手を掴んでピットへと運んでいった。

ピットに着いたシンは、真耶を掴んでいた手を離してはISを解除した。

解除した事により、ザフトの赤服になったシンは、未だにISを展開したキラに近付く。

「お疲れ様。シン」

「いえ。そこまでは疲れてませんが、次はキラさんですね。頑張ってください」

「うん」

お互いに軽くハイタッチすると、キラはカタパルトまで歩みを進めていった。

彼の雰囲気は、既にさっきまで穏やかなものではなく、心臓を鷲掴みするようなプレッシャーと冷たく鋭い殺気を放っていたのは、シンと千冬しか知らない。

墮天使の実力（後書き）

わ、ワンオンアビリティ単一仕様能力が思い浮かばん……

白き大天使VS黒きブリュンヒルデ(前書き)

散々迷いまくった結果、キラと千冬姉になりました。

こんなの千冬姉じゃねえ!と思う方は飛ばしても構いません。

白き大天使VS黒きブリュンヒルデ

管制室の千冬は、発進準備を終えたキラ、” ストライクフリーダム ” を見ていた。

優しい雰囲気を放っていたあのキラが、戦いとなると軍の隊長として、戦士としての自分を表に出している。

それどころか、戦士としての闘気と冷たい殺気を宿している。

それだけで、千冬の心にある欲が生み出された。

戦いたい。” ストライクフリーダム ” とキラ・ヤマトと戦いたい。

教師としてではなく、一人のIS操縦者として。

千冬は自分の口元に、不敵な笑みが浮かんでいるのに気付いた。

「進路クリアー。」

システムオールグリーン。

カタパルト権限をヤマト君に譲渡！

ヤマト君、発進どうぞぞ！」

「キラ・ヤマト。

” フリーダム ”、行きます！」

管制室の光学映像に、ストライクフリーダムが鮮やかなバレルローンをしながらVPS装甲を展開。白く輝く四肢に黒と青のツートンカラーのボディ、金色に輝く関節部と胸部砲口、そして背中の中八枚

の青い翼を広げながら、宙に浮かんでいるのが映る。

そこから発している威圧感は、絶対強者だけが放つ事が出来るものだ。

「山田先生。少々良いか？」

「え？は、はい」

「……………」

真耶からの指令 指定された場所で暫く待機 を受けたキラは悠然と、だが強い威圧感を放ちながらその場で待っていた。

さっきの真耶とシンのを見れば、恐らく実戦形式の演習だろうというのが解る。

だが、真耶はシンとの戦闘で疲れているから、かなりの時間を待たなければならぬだろう。

「待たせたな。ヤマト」

「？」

低い女性の声が耳に入り、キラはふとそちらを向いた。

そこには、”打鉄”を装備した千冬の姿があった。

千冬は真っ直ぐに規定の場所、キラの目の前に着地する。

「…………織斑先生」

スチャ…………

千冬の放つ圧力に、両手に持つ高エネルギービームライフルのグリップを握る握力が強くなる。

不敵な笑みを浮かべているが、放っている威圧感や圧力はかなりの死線を潜り抜けてきた戦士だ。

間違いなく真耶よりも強い。

「織斑先生の装備している機体は、純国産の第二世代型のIS、”打鉄”です。」

武装は近接ブレード一本のみですが　　」

真耶の説明も、キラの耳に入っていない。

それだけ集中している、という事が目に見えて解る。

「　では、これより織斑先生対ヤマト君の実戦演習を始めます」

チャキ…………

チャツ…………

真耶の放送で、向かい合った二人はそれぞれの得物 高エネルギー
ビームライフルと日本刀型の近接ブレード を構える。

「演習、開始！」

試合開始のブザーが鳴った瞬間、キラはいきなりフルスピードで上
昇しながら両手のビームライフルを放ち、千冬もまたキラを追いか
けてビームを躲していきながらフルスピードで上昇していく。

が、”打鉄”は訓練機だ。

キラの専用機の”ストライクフリーダム”とのスペック差はかなり
開いている為、ドンドン開いていく。

嘗ては世界最強IS操縦者の称号”ブリュンヒルデ”としてその名
を轟かせた千冬だが、

「チッ」

つい舌打ちしたくなるというモノだが、それで戦況は打開出来ない。

だが、無論千冬はそれも知っている。

だからこそ、千冬は瞬間加速で光の奔流を掻い潜り、キラに襲い掛
かった。

そこから、キラへの距離は殆ど皆無だ。

「はあっ！...！」

刹那の刺突。加速の力も加わったそれは、絶大なる破壊力を持ってキラに襲い掛かる。

「くっ！」

それに対してキラは、体を右に翻す事で躲すと、逆に千冬の装甲に包まれた腕を回し蹴りで蹴り飛ばす。

「くあっ！！」

回し蹴りにより千冬の体のバランスが崩れると同時に右手から日本刀型の近接ブレードが外れ、グラウンドに向かって真っ逆さまに落ちていく。

当然、キラはこれを逃す筈が無い。

「隙ありっ！」

「チィッ！」

キラのビームライフルから放ったビームを何とか躲すと、千冬は落ちていく近接ブレードを再び握ると再びキラに斬り掛かった。

管制室では、ワンピースの服装で、キラと千冬の実戦演習を見てい

た真耶と赤服で見ていたシンがいた。

本来は実戦形式の演習ではなく、機体のデータ取り 因みにこれはキラとシンは暗黙の了解 なのだが、今やそれを忘れていようだ。

「や、ヤマト君……。」

織斑先生相手にこんなに……」

管制室でキラと千冬の戦闘を見ていた真耶は、愕然とした声を出していた。

が、対照的に後ろで見ているシンは何処か当然なモノを見るような目で見ている。

寧ろ訓練機に乗った千冬でも、この世界に勝てる人間はいないのに、全くシンは動じていない。

そう、この世界では。

「……アスカ君。

ヤマト君は、モビルスーツではどれ程の強さなのですか？」

「？」

そう、ですね……。」

モビルスーツでのキラさんの実力は絶対強者のレベル、と言っても過言じゃないですよ」

それなのに何故、操縦方法が全く違うのに世界最強ブリュンヒルデの称号を持つ千冬をあそこまで手子摺らせるのだろうか。

簡単に言えばそれは、スポーツの選手と戦争の最前線にいる兵士の差だ。

シン達はまだ知らないが、ISは元々宇宙進出の為に作られた。

しかし、そのスペックから兵器、そしてスポーツへの転用をされた。

モビルスーツは、元々は作業用のロボットだったが、それがキラとシンのいたC・Eの戦争の主役となっていった。

スポーツの道具か、それか兵器と思うこの心と、幾多の死線を潜り抜けてきた経験が今のキラとシンの全てを支えている、と言っても過言ではない。

千冬もそれなりに死線を潜り抜けてきたが、何分スポーツとして、だ。

数多の戦場を潜り抜けてきたキラとシンを物差しにして比べると言うまでもない。

「……………」

「……………」

二人は無言になると、再びキラと千冬の実戦形式演習に目を映した。

「ハアッ！」

「くッ！」

ビームライフルを腰に納め、ビームサーベルの二刀流で攻めてくるキラと、近接ブレード一本で相手取る千冬。

だが、千冬の”打鉄”は既に満身創痍だ。

装甲はボロボロ、スラスタにも異常が出ているのかバランスが上手く取れていない。

しかもシールドエネルギーも既に10%を下回っている。

だが、それでも一歩も退かずに戦う千冬。

「そろそろ、か……」

キラはその千冬の姿勢に敬意を表したのか、ビームサーベルを二刀流に構えたまま千冬にハイマツトモードのフルスピードで突進する。

「来いっ！」

千冬もまた、残り少ないエネルギーで最後の瞬間加速イグニッションブーストに入った。

「はあああっ……！！！！」

ガイイイイイン……！！！！

二人の影が合わさったと同時に、鋭い音が鳴り響く。

その音が無くなった瞬間、”打鉄”のエネルギーがエンプティーと表示される。

「ふう……。」

やはりヤマトは強いな。

無傷で私に勝つとは「

織斑先生の方こそ、ですよ。

一歩も退かずに戦われましたよ「

負けたというのに全く堪えた様子を見せない千冬に、キラは笑みを湛える。

「それよりも、機体のデータの方は？」

「……恐らく、”ストライクフリーダム”と”デステイニー”はこれだけではないだろう。」

今はまだ二月だから、四月の入学式まではまだ時間があるから、勉強も兼ねてデータ取りを行うから、また明日もここで訓練だな「

やっぱりたった一回の実戦形式の演習だけではデータは取れなかった様だ。」

しかもキラとシンは幾ら強くても、ISの知識は皆無に等しいので千冬と真耶から教わる事になる。」

「これから、よろしくお願いします」

「気にするな。さて、戻るか」

キラは未だ”打鉄”を装備した千冬の手を掴むと、ピットに向かつてゆっくり飛行していった。

IS学園（前書き）

7月1日。

私、白銀の翼は今年で19歳になりました。

大学一年生で忙しい時期ですが、頑張って書いていきます

IS学園

キラとシンがこの世界に来て二ヶ月。

四月の入学式までに、ISの基本的な知識と演習、機体のデータ取りと世界についての勉強と大忙しの二ヶ月だったが、本人達はそれなりに有意義な時間を過ごした。

勉強に関しては一を知れば十所か千を知り、演習に関しては学園で教えられる基本的操縦方法の殆ど、また応用発展までも習得と、たったの二ヶ月で千冬と真耶が教える事が無くなった。

また時間が空いた日には、国際免許証を入手してキラは車、シンはバイクを購入したり、安価だが良質の私服や携帯電話や教科書やノート等の学用品等の購入も足を伸ばした。

因みに、キラの車はメタリックブルーのボディをしたレクサスで、シンはC・Eで乗っていた赤を基調としたボディをしたバイクと同型のバイクだ。

流石に異世界から来ました、とは言えないので二人のバックストoriesは日本国籍のアメリカ出身で、偶然そこにあつたISを動かした、という事でIS学園（ユース）に入学する事が決まった、というのだ。

既にキラは19歳、シンは17歳と年上だが、ここに入学するのは何歳でも良いらしい。

その時に”ストライクフリーダム”と”デスティニー”を自分達で作った、という事にしておいた。

かなりの捏ち上げだが、異世界の軍隊に所属する軍人です、と声高らかに言うという自殺行為は流石にしたくもないので仕方ないと言えは仕方ないだろう。

宿直室に当てられた部屋で、キラとシンは明日の入学式や授業の準備をしていた。

IS学園はコンマ1までにISの授業にあてがうので、入学式の日にも普通に授業があったりする。

千冬曰く、学園の案内等は地図でも見て覚えろ、らしい。

「シン。」

鞆に明日使う参考書とか入れた？」

「ええ。」

もうとっくに入れました。

参考書と言っても覚えるのが簡単でしたから、すぐに覚えられましたよ」

シンはこう言っているが、参考書は某辞書よりもかなり分厚い。

しかもページずつ文字ばかりなので覚えるのが大変なのだが、それをたったの一日で覚える事が出来るのはコーディネイターが、かなりの努力家かめちやくちゃ記憶力が良い人位だろう。

「明日からはISの授業も入るらしいから”フリーダム”と”デス

ティニー”、忘れないようにしなくちゃね」

「そうですね。」

にしても、明日から何か起きるような気がします……」

「ま、まあ、ね……。」

IS学園は元々は女子校で動かせるのは織斑先生の弟が僕等だけだからね……」

キラが冷や汗をかきながらを言うのも解る。

ISは女性にしか扱えない。

IS学園は女子校で、ここに通う生徒が通っていた学校もまた女子校。

男性に免疫が余り無い。

男性で今の所動かせるのはキラ、シン、千冬の弟のみ。

女子の殆どに興味を持たれる。

毎日追っかけられる。

「「はああああ〜っ……」」

端から見れば天国だが、当の本人達から見れば地獄な日々が始まる。

それが解ってしまった二人は揃って深〜い溜息を吐いた。

翌日。

入学式を無事に終えた二人はあてがわれた組、1-1に向かっていた。

「同じ組で良かったですね。キラさん。でも何か作意的な何かを感じますね」

「うん。」

ISを男性で動かせるのは織斑先生の弟しか他にいないからね。纏めてデータを取るには同じ組に集めて取った方が良い」

数多の視線を浴びながら、キラとシンは1-1の教室の扉を開けた。中からもやっぱり沢山の興味に彩られた視線を感じるが、二人の視線はある一人の生徒にのみ向いていた。

IS学園の生徒にしては広い肩幅、大きな背中、首まで伸びている黒い髪。

このIS学園で数少ない男子にして千冬の弟、織斑 一夏だ。

（あいつが、オレ達と同じISを動かしたもう一人の男子……。嫌、オレ達と同じISを動かした男性、か……）

（彼も、僕等と同じ世界から狙われる立場になるだろうな。
本人がそれに気付いていると良いけど……）

キラとシンはお互いに顔を見合わせ、軽く頷くとそれぞれあてがわれた席　キラは窓側の前から三列目、シンは廊下側の前から二列目に腰を下ろし、教師が来るのを待った。

後ろ姿が小さく見えるのは気のせいではないだろう。

「皆さん。」

入学おめでとう！

私は副担任の山田　真耶です」

全員が座ると同時にガラツと扉が開いては真耶が入りながら自己紹介をする。

だが、残念ながら真耶には誰も向いていない。

それは何故か。

理由と言えは何だが、全員の集中がキラ、シン、一夏に向いているからである。

「え、ええ？

き、今日から皆さんは、このIS学園の生徒です。

この学園は全寮制。

朝から晩まで協力しあって、楽しい学園生活にしましょうね？」

真耶の涙目ながらの説明でも、誰も何も反応を示さない。

女子達はキラとシン、一夏に視線等の全てを集中させている為に聞いてない。

またキラとシン、一夏はその視線を一身に浴びてはかなり緊張をしている為また然り。

中でも一夏は少し表情が青褪めていたり。

「そ、それでは出席番号順に自己紹介をしてもらいますね。では先ずは」

先ずは『あ』の順番からなのか、名字に『あ』が付く生徒が順々に自己紹介をしていき、次は『あす』。つまりシンの番だ。

「シン・アスカと言います。

日本国籍のアメリカ出身で、趣味はツーリングです。

17歳と皆さんよりも二個年上ですが、そこんところは気にせずに普通に接して」

「「「「「キャーーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

「美形第一弾!

勝ち気な弟系!」

「お持ち帰りしたい!」

「黒髪のくせつ毛に赤い瞳!」

「シン様~~~~!!」

「アスカ様〜〜！！」

数々続く黄色い悲鳴にシンやキラ、一夏は少し引き気味になる。

シンの容姿は黒髪にくせつ毛、ルビーのような真紅の瞳、白が強いが健康的な肌、標準的な身長、細いが引き締まった体躯、そして年上だが抱えている信念が強いのか言葉遣いこそ丁寧だが勝ち気な姿勢が滲み出ている。

理想な男性おとこを絵にした容姿に、女子の殆どはそのハートをぐわしつ！と驚掴みされた。

（成る程……。

アスカみたいに趣味とかを言えば……。

でもアスカともう一人の男子ってアイドルに出ててもおかしくないルックスだな……。

しかも身体ガツチリしてるし……。

まあ、仲良くなれば良いよな）

「君。織斑 一夏君？」

「っ…は、はいっ」

思考の海から引き出された一夏は、少し驚いたが為に少し大きな声で応じる。

「あ、驚かせてごめんなさい。

『あ』から始まって今『お』なんだよね。

自己紹介してくれないかなあ？

ダメかなあ？」

まるで子供のような 外見も同様 態度だが、自己紹介した方が良
いだろう。

……眼鏡がずり落ちそうになっているのはご愛嬌である。

「嫌、あの、そんなに謝らなくても良いですよ。
っっていうか自己紹介しますから、先生落ち着いて……」

「ほ、本当ですか!？」

本当ですね!？」

や、約束ですよ!絶対ですよ!」

何が約束なのか全然理解出来ないのは秘密だ。

一夏はクルリと後ろを向くと、自己紹介を始めた。

「織斑 一夏です。

趣味は家事、料理、マッサージです。

あ、ISが使える男の一人ですが、よろしくお願いします」

「「「「「キャーーーーーッ!……!」」」」」

「ニュースを見たよ!」

「わあ、テレビで見るよりワイルド系!」

「カツコイイ!」

「お母さん!」

母の日には彼岸花を届けるからね!！」

またそれぞれ黄色い悲鳴を上げる女子達。

というか母の日には彼岸花を買って喜ぶ母親はいるのだろうか。

(す、凄いな……)

「ふむ、ちゃんと自己紹介が出来た様だな」

「へ？」

つて、げえっ、関羽!？」

スパーン!

「誰が三国志の英雄だ。

馬鹿者」

鋭い音と共に、女性にしてはトーンが低い声。

一夏の姉である、織斑 千冬だ。

「あ、織斑先生。

もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田先生。

クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

さっきとは全くの真逆の声で応ずる千冬。

公私ハツキリとしている所から、仕事に関しては全く手を抜かないのが解る。

「い、いえ。」

副担任ですから、これくらいは……」

ふむ、と頷いた千冬は先程とは全く真逆の厳しい声でクラスに宣言を始めた。

「諸君。」

私が織斑 千冬だ。

君達新人を一年で使い物になるのが仕事だ。

私の言う事は良く聴き、良く理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜く事だ。

まあ、中には二人年上な男がいるがな。

逆らっても良いが、私の言う事は聞け。良いな」

普通に聞けば暴力宣言だが、裏返してみれば『逆らい、ぶつかり合う事で解り合う』『出来ない者は最後まで見捨てない』という意味合いで取れる。

これを裏返して取ったのかは定かではないが、黄色い声援が再び響いた。

「キヤーーッ！」

千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて学園に来たんです？北九州から！」

（（別に北九州から来たとは言わなくても……）（）

キラとシン、一夏の思った事は偶然なのか見事にシンクロした。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

「……毎年、良くもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それとも何か？

私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

これは演技ではなく本心だ。

その証拠に、眉間の皺がかなり深い。

だが……。

「キヤーーーーッ！」

お姉様、もっと叱ってー！」

「でも時には優しくしてー！」

「そして付け上がらないように躰をしてー！」

それに気付いていないらしく、更にきゃいきゃいと騒ぐ女子。

「お前はとつとと席に座れ。
自己紹介が出来ん」

「あ、うん。
解った千冬姉」

「織斑先生だ」

「 Bannon、とまた叩かれた一夏。

「だがしかし、このやり取りがまずかった。

「嘘。

「織斑君って千冬様の弟……？」

「ひょっとして、男でISを動かせるのもそれが関係して？」

「良いなあ。

「代わって欲しいなあ」

「口々に言うが、姉がISを動かせるからといって弟も動かせる、なんていう事は絶対ない。

「そんな事があれば今頃一夏が出て、世界がこんなにてんやわんやの大騒ぎになる事は無い。

「養子を取る、という方法もあるが、今頃になってはそれは叶わぬ夢だ。

「千冬がそれを許すとは到底思えないからだ。

「騒ぐな。静かにしろ。
自己紹介が出来ん」

千冬が一言指導を下すと瞬く間にピタッと止まる。

指導力抜群だが、恐らくこれも人気の賜物だろう。

再び始まった自己紹介。

次々に続いていき、次は『や』。それも『やま』でキラの番だ。

「キラ・ヤマトです。

一応、ISを動かせる男子の一人です。

シンと同じ日本国籍のアメリカ力出身で、趣味はドライブと乗馬、プログラミングです。

19歳と年上ですが、気にせず話しかけてくれると嬉しいです」

「「「「「キヤーーーーー!!!!!!」」」」

「美形第三弾!

しかも紳士系!」

「神様ありがとう!」

「二人っきりの車か馬に乗せて!」

「寧ろ私を何処か遠くへ拉致って!」

「キラ様~~~~!」

「ヤマト様〜〜！」

またしても黄色い悲鳴。

もう三人は慣れたのか、もう退かない。

キラの容姿は、艶やかな茶髪のショートシャギー、健康的な褐色の肌、アメジストの瞳、柔らかい笑みと物腰と、シンとは真逆だがそれも女性から見れば理想的な男性像で、多くのハートをガシツ！と驚掴みした。

キラの自己紹介で黄色い悲鳴がまだ鳴っている時に、チャイムが鳴った。

「いつまで騒いでいる。

SHRはもう終わりだ。

諸君等にはこれからISの基礎知識を半月で覚えて貰う。

その後は実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませる。

良いか。

良いなら返事をしろ。

良くなくても返事をしろ。

私の言葉には返事をしろ。

以上だ」

何という鬼教官。

ここにいる全員が迷彩色の服を着ていたら、間違いなく軍の特殊部
隊に早変わりだ。
レンジャー

そんな事を考えていたキラとシンだった。

S H R が終わって、キラとシンの二人は一夏の席に向かった。

「君が織斑君？」

僕はキラ・ヤマトって言うんだ。
よろしくね」

「オレはシン・アスカだ。

よろしく、一夏」

「おう。

ヤマトにアスカな。

俺は織斑 一夏だ。よろしくな。

そういえば、二人は年上なんだよな」

「うん。

でも、気軽に話し掛けて欲しいな。

僕の事はキラで良いから」

「オレもシンで良いよ。

同じ男なんだし、仲良くしていこう」

「ああ、よろしくな。

キラ、シン。

俺の事も一夏で良いぜ」

早くも友達になった。

実際、キラとシンと一夏は誰とでもすぐに友達になれる性格の持ち主だ。

キラはその穏やかで優しい性格、シンは強気で隠し事をしようとしていないストレートな性格、一夏は飄々としているが優しい性格と、誰もがすぐに友達になれるのだ。

だが周りにいる女子 廊下には上級生も沢山いる がそれが出来ない。

周りが周りでちょっと行こうとすれば抜け駆けされると勘違いされてしまうからだ。

そこへ

「ちょっと良いか？」

艶やかな黒髪をポニーテールに結んだ、目つきの鋭い少女が三人に話し掛けてきた。

「……君は確か」

「篠ノ之 箒だ。」

ヤマト、アスカ。 済まないが一夏を借りても良いだろうか？」

「え？」

まあ、良いけど」

「感謝する」

篤は頭を下げ、感謝の意思を示すと、一夏の手を掴んで廊下へ出て行った。

「誰、なんでしょう?」

「さあ、一夏の事を知ってるような態度だったから、幼なじみかも」

「ああ、それなら納得ですね」

一夏がいなくなったが、それぞれバラバラになるよりかはマシだ。

二人は休み時間の間、雑談する事にした。

因みに周りの女子達は休み時間が終わるまで入り込めなかった。

女尊男卑（前書き）

噛ませ犬的なお嬢様が登場します

女尊男卑

時間が経って、今は一時間目。

入学式直後の授業は真耶が受け持ち、千冬は窓際に置いてある椅子で様子を見ている。

この授業はこれまでに習ったISの復習みたいなモノであり、大切な授業である。

キラとシンは女子達と混ざって余裕にノートを取っているが、一夏はついて行けてないのか、少々もたついている。

「はい！」

ではここまでで何か質問は無いですか？」

一旦説明を終え、真耶は皆がついて行けたのかを確認すると、一人の生徒が手を挙げた。

その生徒とは、世界でISを操れる数少ない男性、織斑 一夏だ。

「織斑君？」

何処か解らない所は有りますか？」

「殆ど全部解りません……」

「……へ？」

妥当な反応である。

「ぜ、全部……ですか？」

「こ、これっぽっちも、ですか？」

「こ、これっぽっちもです……」

「え、えっと……」。

お、織斑君以外で皆さん現時点で解らないっていう人はいますか？」

シーン……。

誰も手を挙げない。

無論、同じくISを使える男性であるキラとシンも同様に手を挙げない。

女子と同じくAからZまで完全に理解しているからである。

「織斑。

必ず読むようにと言ったあのテキストを読んでないのか？」

そう言う千冬の声も、僅かだが厳しい色に染まっている。

どうやら彼女は彼女なりに一夏に注意していたらしい。

因みに彼女が言うテキストとは、あの某辞書よりも厚い参考書の事である。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

バシーン！

「馬鹿者。あれは必読と書いてあっただろうが。後でテキストは再発行して貰え。そして一週間以内で覚える」

「いつつ……」

あ、あの分厚いのを……一週間ではちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。」

やります……」

「全く……」。

ヤマト。アスカ。後でこの馬鹿者にISについて教えてやれ。男同士の方が扱はかどるだろう」

「はい」

「解りました」

頷く二人だが、一夏は痛みに悶えながら二人の方を見遣る。

「えと、キラとシンはもう覚えたのか？」

「安心しろ。ヤマトとアスカは既に覚えたからな。」

何処かの大馬鹿とは違ってちゃんと取ってあるしまった覚えている。話が脱線したな。授業再開だ」

千冬の一言により、再び授業が再開したが、専門用語の羅列の所為で終わった時の一夏の身体は某ボクサーと同じくらい真っ白になり、頭から湯気が出ながら机に身を預けていたのは言うまでもない。

休み時間

「一夏？

おーい、一夏〜」

「……………」

休み時間になっても未だに真っ白になりながら机に身を預けている一夏に、シンが肩を叩くが一夏は全く反応を示さない。

「どっ？シン」

「ダメです。

全く目を覚ましません」

「……。そっだ」

何か思いついたのか、キラの頭の上に豆電球が光を出す。

「シン。これを言ってみて」

「ん？ 解りました」

頷くと再びシンは一夏に近づく。

「一夏……」

後5秒で起きないと織斑先生の授業が始まるぞ……。

5、4、3、2、1

「ま、待て千冬姉！

俺は寝て あれ？」

いきなりガバツと起きた一夏。

いつの間にか真っ白だった身体が普段の身体の色になっている。

恐るべし我等が担任、織斑 千冬。

「起きたね。一夏」

「キラ、シン！

今千冬姉が来るって聞こえたか？」

「何の事？」

それより一夏。これを」

一応ボケてみた主犯のキラは、何かをドサツと机に置いた。

何か分厚い本の様なモノ。

キラの持っていたISの参考書である。

「キラ、良いのかよ？」

「良いよ。」

友達の為だし、ね」

「でも、それじゃキラが　！」

「大丈夫だから」

「あ、ああ……」

キラの有無を言わさない程の殺気を含んだ声に一夏が頷き、参考書を貰った時だった。

金髪のロングヘアをした少女が、三人に話し掛けてきた。

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

「ん？」

「はあ？」

可愛らしい声に、三人が三者三様に返事を返すが、少女はその反応が気に食わなかったのか、少し驚いた声で返す。

「まあ！何なんですの！？

その反応！

折角わたくしに話し掛けられているだけでも光栄なのですから、相應の態度がおありでしょうが！」

「あゝ……、悪い俺君の事知らないし」

「一夏。

イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだよ」

「代表候補生？

キラ、何だそれ？」

「代表候補生って言うのは、読んで字の如く、国家代表IS掃除者の事だよ」

「ふーん。

凄いのか？それ」

「ああ。

簡単には選ばれない奴だ。

人数にも限りはあるし、適性レベル、教養、技術その他諸々が優れていなければ代表候補生になれない。

更には国家や企業から専用機が支給されているからな。

一言で言えばエリートだ」

「そう！

アスカさんのおっしゃられる通り、エリートですわ！」

一々癪に触るような発言ばかりするセシリアに、キラと一夏は視界に入れないようにスルーしていた。

シンに至ってはセシリアを敵意剥き出しの目で見ていたが、キラに軽く小突かれる事で元の普通　と言ってもしかめつら　に戻した。

キラやシンは、それぞれザフト軍の隊長とエリート、更には”FAITH”に選ばれた軍人だが、それを明白あからひびに誇った事は皆無だ。

寧ろ選ばれた自分達が何をすべきなのか、それをずっと考えていた。

一夏はエリートではないが、ISを動かせるというのが解ると周りに主に男から　から羨ましがられたりされたが、誇った事はない。

だからこそ、セシリアの言動全てが癢に触ったのだ。

だが、キラとシンの二人はセシリアの態度にはもう一つの感情があった事に気付いていた。

「へえ、エリートねえ……」

「そう！

本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくする事だけでも奇跡なのよ。

その現実をもう少し理解して頂ける？」

「光栄だ」

「確かに」

「ああ」

「……馬鹿にしていますの？」

彼等の棒読みの贅辞に不満を抱いたのか、セシリアが不機嫌な表情で三人を睨む。

そう、キラとシンが気付いたもう一つの感情は『女尊男卑』だ。

ISを動かせるから強い、ISは女性にしか操れない。

そうだった感情が今の世界を覆っている。

セシリアの態度はまさにそれを小さく縮小したようなモノだった。

「大体、織斑さんは何も知らない癖に良くここに入学出来ましたからね。」

初の男性IS操縦者だという事で少し期待していましたが、飛んだ期待ハズレですわ。

ヤマトさんとアスカさんはそれなりに知識があるようですが、わたくしと比べると月とスッポンですわ」

明らかに一夏とキラとシンを馬鹿にしている言動だ。

一夏達がここ、IS学園に入学出来た事に知識は一切合切関係無い。

キラとシンの場合は全く特殊な例だが、もし一夏がここに入学していなかったら何処かの実験動物モルモットになっていただろう。

「まあでも、わたくしは優秀ですから織斑さんの様な方にも優しくしますわよ?」

これの何処が優しさだ。

これが優しさなら世界中はきつと傲慢な世の中に早変わりだ。

シンは煮え繰り返る怒りの余り、左耳のイヤークラス 待機状態の”デステイニー”を展開しそうになったが、キラに再び軽く小突かれて平静を取り戻した。

セシリアは未だに傲慢を吐き続ける。

「まあでも、ISの事で解らない点があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくなってよ。」

ヤマトさんやアスカさんも流石にエリートであるわたくし程ではないでしょうし、何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？」

俺も倒したぞ。教官」

「僕も倒したけど」

「オレも」

一夏とシンの場合は真耶が相手になり、一夏は突っ込んでくる真耶を躲すと壁に激突して動かなくなり、シンは”デステイニー”でちやんと戦闘をして勝った。

キラの場合は”ストライクフリーダム”で千冬と戦って、イグニッションブースト瞬間加速
すら知らないまま倒した。

「はあ!?!」

「倒したって言っても、躲したら壁にぶつかって動かなくなっただけだ」

「僕も特に苦戦しなかったな（織斑先生と戦って勝ったなんて言えないし……）」

「オレも苦戦しなかったな」

「わたくしだけと聞きましたが……」

「女子ではっていう話だろ」

シンの皮肉にピシ……と氷に輝が入る音が響く。

「貴方方も教官を倒したっていうの!？」

「えーっと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ」

キンコーンカーンコーン

激昂するセシリアの声に被さって、三時間目の授業が始まるチャイムが鳴り響く。

何と言うグッドタイミングなのだろうか。

「っ………続きはまた改めて!

宜しいですわね!？」

何処かの悪役に似た台詞を吐きながら去っていくセシリアの後ろ姿を見送る事無く、キラとシンは自分の席にへと戻っていった。

再び時間は進み、放課後。

放課後の茜色に染まった教室にいるのは、キラとシンと一夏のみだ。

一夏は今日習った事をキラの参考書を使って復習していて、キラとシンは一夏のアドバイス等をしている。

と、そこへ真耶が教室に入ってきた。

しかも書類を片手に持っている。

何か会議でもあったのだろうか。

「ああ、織斑君、ヤマト君、アスカ君。まだ教室にいたんですね。

良かったです」

「はい？」

「山田先生？」

「どうしたんですか？」

「えつとですね。
寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号と鍵を一夏の机に置く真耶。

キラとシンには1026が二枚と二個の鍵、一夏には1025が一枚と一個の鍵だ。

これは一体どういう意味なのか？

「えと、山田先生。」

俺は一週間は自宅からの登校と聞きましたが？」

「僕達は部屋が決まるまで宿直室に泊まるという話でしたけど？」

「そうなんですけど、事情が事情なので政府からの特命らしいのです。」

とにかく寮に入れる事を最優先にしてみました。

織斑君の場合ですと、一ヶ月すれば個室が用意出来ますので暫く相部屋で我慢して下さい」

確かに、それなら大丈夫だ。

IS学園にいる以上、何処かの遺伝子工学の研究所の人は来ない。

少なくとも最低三年は保証される。

だが一つ問題がある。

「部屋は解りましたけど、荷物はどうするんですか？キラとシンは

宿直室だから大丈夫ですが、俺は一回家に帰らないと準備出来ませんし。

今日はもう帰って良いですか？」

「ああ、荷物なら」

「荷物なら既に手配して送っておいた。有り難く思え」

再び聞こえるのは低い女性の声。

担任の織斑 千冬だ。

「」「ど、どうもありがとうございます……」「」

「まあ、生活必需品だけだな。

着替えと携帯の充電器があれば良いだろう」

大雑把にも程がある。

どちらにしろ、何回か家か宿直室に帰らないといけないだろう。

「では時間を見て部屋に行って下さいね。

夕食は六時から七時、寮の一年生食堂でお願いします。

各部屋にシャワーがありますが、大浴場もあります。

学年毎に使える時間も違いますけど、織斑君達は今の所使えません」

「え？何ですか？」

ガクツとコケるキラとシン。

これを素で言っただとしたら大した男だ。

「い、一夏。」

まさか同年代の女子と入りたいのか？」

「あ、あー……。
そうだった」

IS学園は言い換えれば女子校だ。

入ったりでもしたら即刻独房行き間違いなしだ。

「おつ、織斑君つ、女子と入りたいんですか！？
だ、ダメですよ！！」

「い、嫌、入りたくないです」

倫理的にダメである。

「ええっ？」

女の子に興味ないんですか！？
それはそれで問題なような……」

「少しは人の話を聞いて下さいっ！！」

「ひうっ！」

キラとシンの鋭いツッコミに、真耶は小動物のように身体を震わせると漸く落ち着きを取り戻したのか震えなくなった。

廊下では、女子が『婦女子談義』なるモノを花咲かせていたが華麗にスルーである。

「それじゃ、私達は会議があるのでこれで失礼します。
ちゃんと寮に帰るんですよ。
道草食っちゃダメですよ」

校舎から寮まで僅か五十メートルしかないのにどうやって道草を食えと言っのか。

千冬と真耶が教室から出ていくのを見送ると、三人は寮に帰っていた。

「それじゃあね。一夏」

「お休み」

「おう。じゃあな。キラ、シン」

一夏と別れた二人は、部屋番号を確認すると鍵を差し込んで扉を開けた。

二人の目に飛び込んだのは大きめのベッド。

そこらにあるビジネスホテルより高級品だというのが解る。

ソファアの近くに架けてあるハンガーにはザフトの白服と赤服がある。

しかも衿元と袖にあるザフトのエンブレムは上から黒い布で隠されている。

「キラさん。

先にシャワー良いですか？」

「うん。良いよ。

僕は少し調べ物があるから、ゆっくりして」

「はい。解りました」

シンはクローゼットからタオルや着替えを取り出すと真っ直ぐシャワーを浴びに行った。

キラは制服からザフト白服に着替えると設置してあるパソコンを立ち上げた。

調べ物というのは、今日絡んできたセシリアの事だ。

「セシリア・オルコット。

年齢は十五歳。

イギリスの名家、オルコット家の長女にして代表候補生。専用機は第三世代型のIS、”ブルー・ティアーズ”。

BT兵器やレーザーライフルを主武装としている……。

BT兵器は一言で言えばドラグーンみたいな誘導兵器。

でも弱点は展開している時は移動、攻撃が出来ない、か……」

”ストライクフリーダム”や”レジェンド”等と似た武装だが、ドラグーンの性能においては特殊な空間認識能力を使わなく、それでいてビームソードやビームスパイクを展開出来る”ストライクフリーダム”や”レジェンド”の方が高性能だ。

その上に”ブルー・ティアーズ”は並行処理能力もそう高くない。

「ふう……」

天井を見上げ、軽く息を吐く。

明日は恐らくセシリア辺りが再び絡むだろう。

だが関係無い。

自分達と戦うならば一片の手加減をしない。

一夏が戦う事になると、付け焼き刃かも知れないがそれまでに一夏を鍛えれば良いだけの話だ。

キラは明日の方に思いを寄せていた。

隣から何やらドタバタと聞こえてきたのは華麗にスルー。

女尊男卑（後書き）

はてさて、誰と誰を戦わせましょうか？

クラス代表決定戦はどうしましょうか？

無謀過ぎる挑戦状（前書き）

イギリスのお嬢様が喧嘩を売ります。

無謀過ぎる挑戦状

昨日がいきなり前途多難を告げていた嵐の様な初日でも、明日になれば皆平等に朝というモノが来る。

無論、それは例えどんな生きとし生きるモノにも……。

チュンチュン……

窓の外から聞こえる雀の囀りと、柔らかい朝日がカーテン越しに部屋の中に入り込む。

「ん……ふぁ……」

窓側のベッドに寝ているキラの瞼に朝日が当たり、彼を夢の中から引きずり出した。

「今はつと……」

現在の時間は午前六時半と、随分と余裕のある時間だ。

だがだからといって、布団の誘惑まじろみタイムに負けてしまえば確実に遅刻。

そうなれば千冬の出席簿スマッシュと、良いことが無い。

「よしと……」

シン、朝だよ

「ん……う……」

おはようございます……。

キラさん……」

「おはよう。

さ、顔洗ってきて良いよ。

モーニングコーヒー入れてあげるから」

「はい……」

ふあ、と未だに眠そうに欠伸をしながら、シンは洗面所に向かった。

シンが洗面所に向かったのを確認すると、キラは真っ直ぐ厨房に行き二人分のコーヒーを作り始める。

因みにこれはバルトフェルド直伝のコーヒーで、香りとはる苦さからキラとシンのような若者には大好評なコーヒーである。

黒い液体が芳香を醸し出して部屋の中を包んでいく中、キラは今日起こるだろう事を考えていた。

（今日は恐らく、昨日絡んできたオルコットさん辺りが絡んでくるだろうな……。シン辺りが怒らないか心配だな……）

そう考えながらも、手慣れた手付きでコーヒーを混ぜていき、また二個のカップに煎れていく。

（まあ、正直シンの気持ちも解らなくはないけど、いざという時は止めようかな……）

「キラさん。

お待たせしました」

キラの決意と共に、シンが洗顔と歯磨きを終えて出て来た。

「ああ、シン。丁度良かったね。」

今コーヒー煎れたから、飲んで良いよ」

「はい。」

じゃあ遠慮無く」

白が強い顔を僅かに綻ばすと、シンはキラが用意したコーヒーカップの一つに手を伸ばし、口に流し込む。

「やっぱりキラさんの煎れたコーヒーはいつ飲んでも美味しいですね」

「ありがとう。シン」

大絶賛である。

因みにバルトフェルドが煎れたコーヒーだと、シンの反応は全くの真逆で、「若者の味覚が良く解らん！教えるキラ！」と何度かキラに詰め寄られ、首を前後に揺らされながら聞かれた事がある。

が、それはキラも解らないというので解答は先送りになったりしている。

直伝のコーヒーなのだが、何故こつも反応が違うのか。

だが、今のキラには昔を思い出させる暇が無かった。

(何か問題が起きなきゃ良いけどな……)

キラは一つの心配をしながら、洗面所に向かい顔を洗い始めた。

それから暫く経って制服に着替えたキラとシンは寮の食堂に着いた。

IS学園の食堂は、世界各国からのIS操縦候補者が集まる公立高校という事もあってか、メニューは多国籍な料理が占めている。

しかも資金を出しているのは日本国という事もあってか、メニューの多さに相まって豪華な食事である。

そのメニューの中でキラは和食の焼鮭定食、シンは洋食のクロワッサン定食とサラダ、牛乳を注文して席を探していた。

「あ、おーい！

キラ、シン！」

「ん？」

「あ？」

ふと二人を呼ぶ声が聞こえると、そこには一夏が箒が朝食を取って

いた。

しかも前には二つ席が空いている。

座るには申し分ないし、友達である一夏が誘っているので、無下には出来ない。

「おはよう。

一夏、篠ノ之さん」

「おはよう。二人とも」

「おう。おはよう」

「……おはよう」

前にある二つの席に座る二人に、一夏と箒はそれぞれ挨拶をする。

先に食べていた事もあって、二人のトレーにある食器は殆どが空だ。

「キラ、シン。

改めて紹介するぜ。

幼馴染みの篠ノ之 箒だ。

改めてよろしくな」

「そう。

改めてよろしくね。

篠ノ之さん」

「よろしくな」

「よろしくな。」

ヤマト、アスカ」

早朝からいきなり仲良しになった四人。

「そついえば、シンとキラって結構少なめなんだな。昼まで持つのか？」

「え？うん。」

朝は少なめ取るタイプなんだ」

「オレもまた同じ。」

多めに取ると逆に動けなくなるからさ」

ふーん、と頷く一夏と篝。

だが、本当の理由はモビルスーツでの戦闘の事を考慮して、今のこれが習慣付けられたのだ。

ISはモビルスーツと違って、高速機動の際に発生するGは殆ど殺される為に余り苦しくはない。

だがモビルスーツに於いては全くの真逆。

高速機動時に発生するGで、胃の中のモノをぶちまけてしまう事がある。

最も、この二人は一度もなった事は無いが、もしもなった時の事を考えてこうなったのだ。

だからこそ、少ない量だが栄養豊富なモノを摂取しているのだ。

「ほう。」

まあ人の食生活については文句は言わねえよ。

失礼だしな」

二人は深く入り込もうとしない一夏に心底感謝した。

「シン。」

もうそろそろ行かなきゃ行けない時間だから早く食べ終わらないと遅刻するよ」

「へ？」

確かに時計を見てみるともう行かなければ行けない時間だ。

しかもキラと一夏と筈はもう既に食べ終えている。

「やっべー!!」

シンが慌てて食べ始めたその時、食堂に手を叩く音が響いた。

「いつまで食べている！」

食事は迅速に摂取しろ！」

遅刻をしたらグラウンド十周だからな!!」

千冬の厳しい声で、まだ食べていた周りの女子達が慌てて食べていく。

白いジャージ姿なのに凜々しい姿だ。

「あれ？」

千冬姉って寮長だったのか」

「らしいね。」

僕等も昨日聞いたけど」

「ムガムガ……ング……」

取り敢えず急いで食べているシンを尻目に、三人は食べ終えたトレ
ーを片付けるとシンを待つ為に廊下で待った。

全員結構余裕ぶっこいて遅刻しそうになったのは秘密である。

102

時が進んで朝のSHL。

先日は真耶が立っていた教壇に、今は千冬が立っている。

余程大事なのか、真耶はノートを持っている。

「これからクラス対抗戦に出る代表者を決める。

クラス代表者、というのを読んで字の如くだ。

対抗戦だけではなくて生徒会の会議や委員会への出席等……。

まあ、クラス長と捉えても良い。

クラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

現時点では大した差は無いが、競争は向上心を産む。自薦、他薦は問わないが一度決まると一年間変更は無い。その積もりでな」

明らかに面倒な役回りだ。

ざわざわと生徒全員がざわめいていくが、実戦経験を積めるのは良いとして、生徒会や委員会の会議の出席だとしても遠慮してしまう。なつてしまえばその者にはクラスから、無事を祈る黙祷が捧げられる事間違い無しだ。

「はいつ。」

織斑君を推薦します！」

「いつ!?!」

「じゃあ私はヤマト君に一票を！」

「へ!?!」

「アスカ君を推薦します！」

「おいつ!?!」

瞬く間に男三人が推薦に選ばれてしまった。

解る通り、皆男がクラス代表になる事で注目と情報を集めようとしている。

千冬の方はそれを理解しているらしく、辞めさせようとしたが如何せん、自分のやり方ではこれを覆す事は出来ない。

が、それを覆してくれた勇者（？）がいた。

「納得がいきませんわ！」

皆一様にその声の方を向く。

そこには先日キラとシン、一夏を見下していたイギリス代表候補生、セシリア・オルコットが怒りで顔を赤くしながら立っていた。

「そのような選出は認められません！」

大体、クラス代表が男なんて良い恥さらしですわ！！」

また始まった男への見下しに、一夏は早速ムカツ腹を立て、シンは紅蓮の様な熱い殺気を、キラは氷の様に冷たい闘気を内に秘め始めた。

だがセシリアはそれに気付かずに、傲慢を吐き続けていく。

「このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間受けるとおっしゃるのですか！？」

思い上がりで女尊男卑もここまで来ると甚だしい。

「実力から言えば、わたくしがクラス代表になるのは必然！それを極東の島国の猿にされては困ります！」

大体、文化としても後進的な国で過ごさなければならぬという事自体、耐え難い苦痛で」

遂に日本への侮辱が始まった時、一夏が席を立った。

「イギ
」

「昨日から随分と偉そうな口を叩きやがって！

イギリスだってお国自慢あんのかよ！？」

自慢したら世界一不味い料理くらいだろ！！」

一夏の言った言葉にシンが覆いかぶさるように立ち上がり、激昂の声を上げる。

「なっ………！？」

「………！」

そうだね。イギリスの見所なんてビッグ・ベンくらいでしょう？

それ以外は古いだだけの国だね」

キラがシンを注意すべく、立ち上がりかけるが、こつなつたシンはもう止まらない。

元々キラも、セシリアに対して怒りの感情を抱いていた為に止めるのを止めたがそのかわりに後でちゃんと注意をしようと思いつきながらセシリアに言い返した。

「あっ…あなた方っ！

我が祖国を侮辱しますの！？」

セシリアが鋭い眼光でキラとシン、一夏を睨む。

しかもその眼光には殺意すら浮かんでおり、一夏には怯む要因にはなるが、元は軍人で過酷な戦場をくぐり抜けてきたキラとシンに取っては微風にすらならない。

「先に日本を侮辱したのはどっちだ！あんなの方だろ！？
それに昨日からオレとキラさんや一夏を見下した態度！それが英国淑女の在り方かよ！」

「イギリスのこれが通常だったら余程民度の低い国だね。
行きたくなるよ」

「な、なっ……！」

宜しいでしょう、そこまで仰るのなら、決闘ですわ！

キラ・ヤマト、シン・アスカ、あなた方の先程仰れたイギリスを、英国淑女を侮辱したその言葉、後悔して差し上げますわ！！」

よりによって一夏ではなくキラとシンに喧嘩を売ってきた。

自分に叩き付けられた挑戦状に、キラとシンはそれぞれザフト軍人としての、隊長と赤服兼”FAITH”を着任した自分を表に出した。

キラは零度の様に冷たい闘気と、シンは紅蓮フレッシェの様な熱い殺気と心臓を鷲掴みにしてそのまま握り潰す様な重圧プレッシャーを放っている。

「ならば一週間後の放課後、第三アリーナでアスカとオルコット、そして勝った方が織斑との模擬戦を行う。
勝った方がクラス代表だ。

アスカとオルコット、織斑はそれぞれ用意をしておくように」

「先生！」

キラ・ヤマトが入っておりませんわ！」

セシリアが言うのも解る。

キラも指摘したのに、そのキラの名前のキも入っていないのでは怒るのは無理も無い。

「ああ、それか。

オルコットの相手はアスカのみだ。

正直お前の実力ではヤマトに掠らせる事すら出来ん。

アスカも正直お前の攻撃を掠らせる事すら出来んが良くて数分持つくらいだろうがヤマトは良くて遊びで瞬殺。

はつきり言つて障害物にすらならん。

それではお前が哀れだからな」

これが一夏やキラ、シンが言っていたら笑いが起こるだろうが、千冬がそんな冗談を言う性格には見えないので誰も笑わない。

「く……わ、解りましたわ。

ですが手加減等無用ですわ！」

そもそも代表候補生が男に負ける事なんてありませんですから！」

「ほう、言い切ったな小娘。

アスカ。なら一切の手加減や情けをかけてやるなよ」

「言われず共、その積もりです」

結局、SHLはこれで終わったが、セシリアのキラとシン、一夏を見る目が今まで以上に見下し、また殺意が浮かんでいたのは言うま

でもない。

その日の昼休み。

キラからの軽いお説教の後、千冬に呼ばれたキラ、シンと一夏の三人は、生徒指導室に集まっていた。

「織斑。」

お前のISだが、準備に時間が掛かるといふ事で学園から専用機が受領される事になった」

「専用機、ってあれですよね。」

あのオルコットみたいな国家の代表候補生が持つ事を許されるって……」

「ふむ、ちゃんと勉強しているようだな」

「キラとシンの説明のお陰ですよ」

千冬からの珍しい賞賛に、一夏は少し照れ臭そうにしながら答える。

実際、一夏は時間が余れば、キラとシンからISについて詳しく説明を受けていた。

キラとシンの二人はISの知識は学園で学ばれるモノも相まって、

千冬からの説明を聞いてまた奥底まで理解していた為、その知識は開発の一人者である篠ノ之 東並になっている。

「そこでだ。」

アスカとオルコットとの試合の間にお前のフォーマット初期化と最適化を済ませる事にした」
ファइटティング

「えっと、それってつまり、シンとオルコットの試合の間に専用機を自分に合わせる、という事ですよね？」

「その通りだ。ヤマトとアスカには感謝しろよ？」

「はい」

頷く一夏に、キラがある種の質問を仕掛けた。

「そういえば一夏は射撃と格闘、どっちが得意？」

「え？」

えっと……格闘の方が得意、だな。

射撃は的に当てるの難しいし……」

「そうか。」

おい、入って良いぞ」

千冬の合図と同時に、指導室の扉が開いて誰かが入ってきた。

長い艶やかな黒髪をポニーテールに結んだ少女、篠ノ之 箒だ。

「篠ノ之、一週間織斑に格闘を教えてやれ。」

こいつも剣道をしていたからな。
感覚を取り戻させてやれ」

「はい！」

一夏、早速今日の放課後からするぞ！」

「ほ、筈……。」

お前部活はどうすんだよ。
剣道部だろ？お前」

「大丈夫だ。」

既に許可を出した」

何と言う手の速さ。

これには流石のキラとシンも舌を巻いた。

「よし。では解散だ。」

さっさと昼食を取ってこい」

「「「「はい「「「「」

千冬が取り仕切り、四人は指導室から出て行った。

降臨する墮天使

セシリアから決闘を申し込まれた日から一週間後の第三アリーナ。

第三アリーナのAピットで、キラとシンはある機体のOSを見ていた。正確にはキラがOSを見ていてシンは後ろで助手をしている。

純白。何物にも染まらない無の色。何物にも流されない純粹な色をした機体。

男である一夏の為に開発されたIS、”白式”である。

二人がここにいるのは、単純に一夏に与えられた専用機がどういうモノなのか興味を抱いたのと、間違いがあれば訂正すると自分達から言い出したからである。

無論、千冬と真耶も了承している為、問題は無い……らしい。

「一夏は剣道をしていただけで言うていましたが、武装が近接ブレード一本のみって……」

「それだけじゃない。

ワンオフアビリティ

単一仕様能力の　　は燃費が激しい上に近接ブレード、完全に

近接戦闘のみの短期決戦特化型だね……」

「ふ、二人ともISのOSまで見れるなんて……」

「操縦技術や記憶力だけでも十分驚いたが、これまで熟すなんてな……」。

最早私達の常識が外れた様な気がする」

呆ける真耶に苦笑しながら二人を見る千冬。

千冬の口からこのような言葉が吐き出された事に少々驚く真耶。

確かに、あの二人は次元が違う様な気がする。

操縦技術に於いても、理解力と判断力、記憶力に於いても、そしてこのプログラミングに於いても。

高次元に発揮出来る才能か、それとも血を滲むような努力か。

どちらにしても群を抜いている。

「そろそろだな……」。

ヤマト、アスカ。織斑達が来るからもうその辺で良いぞ」

「はい」

「了解しました」

千冬に呼び戻されたと同時に点検を終えた二人は、大急ぎでパソコンの電源を落として様々な色をしたコードを外していく。

それから暫く経って、一夏と箒がやって来た。

箒の方は制服だが、一夏の方は今日漸く来たであろう男性版ISSスーツを着ている。

「遅いぞ。」

アスカはこれから試合だというのに余り待たすな」

「あ、嫌、千冬姉。」

これは「

スパーン！！

遅れた理由を言おうとした一夏だが、それを遮る様に出席簿スマツシユが一夏の頭に炸裂した。

「言い訳は聞かない。」

それと千冬姉じゃなくて織斑先生だ。学習しろ。さもなくば死ね」

今一瞬、何とも教師とは思えない単語が出た気がしたが、そこは敢えて気にしない。

「それよりも、一夏。」

これが君の専用IS、”白式”だよ」

キラの掛けた言葉と同時にピット搬入口が開き、さっきまでキラとシンが見ていた曇りなき純白の色をした機体が露わになる。

「”白式”……。」

これが、俺の専用機……。」

ふと、一夏は”白式”の装甲に手を置いてみた。

「どうした……?」

質問してくる筈の声も聞こえない。

というよりも耳に入っているが、一夏の頭にまでは到達していない。

(馴染む……。理解出来る……。)

これが何なのか、何の為にあるのか……。解る……)

「すぐに装着しろ。アスカを余り待たすな」

「……はい」

千冬の鶴の一言で漸く思考の海から引き上げられた一夏は、コックピットに腰を下ろした。

「そうだ。

座る感じで良い。後はシステムが最適化する」

カシュツ、カシュツという音と共に、”白式”の装甲が展開し、一夏と一体化する。

まるで最初から一夏の体に合ったかのように。

「よし。アスカ。

余り淑女を待たすのは紳士ジェントルマンとしては反するからすぐに発進だ」

「はは……。了解です」

「頑張れよ！シンー！！」

「ああー！！」

一夏からのエールを受けたシンは次にキラを見遣る。

キラは軽く頷くと、軽い微笑みを浮かべたまま親指を立てた拳をシンに突き付ける。

シンもまた、同じ様に親指を立てた拳をキラの拳に軽くコツ、とぶつける。

「じゃあ、僕は観客席に」

キラはそう言い残すとそのまま観客席の方へと歩いていった。

キラの後ろ姿を見送ったシンは左耳のイヤークラスに念を込め、”デステイニー”を装着。光に包まれてから僅か0.3秒で、シンの顔面以外の全身を、鉄灰色の装甲に覆われた。

背中には張った巨大な翼と、左背面に高エネルギー長射程ビーム砲を、右背面にレーザー対艦刀”アロндаイト”を、両肩にはビームブーメランを装備したIS、”デステイニー”だ。

「すげえ……」

カッコイイなシンのIS！

「フルスキン全身装甲、だと!？」

しかもこんなIS、見たことがない!!」

筈が驚くのも解る。

そもそもISというのは全身に装甲はいらない。

それは何故か。必要無いからである。

シールドエネルギーを消費する事で発生するオートシールドと絶対防御が、自動的に操縦者の体と命を守るからだ。

だがそれ以前に”デステイニー”はノーナンバーのIS、つまり篠ノ之 束が開発したモノではない。

そしてそれは”ストライクフリーダム”も同じであるが、今キラはここにいないので知らない。

シンは二人の驚愕と感嘆を背中で感じながらも、カタパルトまで歩みを進めて接続する。

「進路クリアー。システムオールグリーン。

カタパルトの権限をアスカ君に譲渡。

アスカ君、発進どうぞ！」

「シン・アスカ。

”デステイニー”、行きます！」

発進する際の台詞を言った瞬間、シンの体は外界へと吐き出された。

シンはそのまま鮮やかなバレルロールをしながらVPSを展開、ボディを赤、青、白灰に変化させる。

「ふ、フルスキン全身装甲型ですって!?

な、何なんですか、そのIS!?

「"デステイニー"。
それがオレのISの名前だ！」

既にアリーナにて待機していた青い機体 "ブルー・ティアーズ"
を装着し驚愕したセシリアに、シンは高らかに自分の相棒の名前
を言う。

だが驚愕していたセシリアはすぐに気を取り直すと、主砲である長大なレーザーライフル"スターライトmk?"の銃口をシンに向ける。

「フン。」

随分と遅かったですわね。

まさか逃げ出したのかと思いましたがわ！」

「遅れたのは謝るぞ。

ちよっとお茶を楽しんでいた」

「あら、レディーとの約束を遅れるとは紳士の風上にも置けませんわよ?」

「紳士じゃないから別に遅れても良いだろ」

イギリス淑女らしく、優雅に嫌味を言うセシリアだが、シンは余裕を持って返す。

昔のシンだとまず間違い無く激昂するだろうが、今のシンはそれくらい余裕があるのは間違い無くキラを始めとした超頼れる先輩方のお陰だろう。

「そのままお茶を楽しんでおられたら宜しかったのに……。
どうせあなた方が束になってかかって来てもわたくしの勝利は変わ
りませんからね！」

女尊男卑と天狗の鼻もここまで来ると末期だ。

まあ先週に千冬から一切の手加減や情けはかけるな、と言われてい
たが、シンは最初から手加減する気なんてサラサラ無かった。

”スターライトmk?”のセーフティー解除の表示がシンの目の前
に現れるが、シンはリアスカートにかけられた高エネルギービーム
ライフルを握ろうとしない。

「これが最後通告ですわ！」

わたくしの勝利は自明の理。

今泣いて謝れば、許してあげない事もなくつてよ」

「……随分と天狗になっているな。

足元掬われないように気を付けるよ」

「そう……。」

なら、お別れですわね！」

構えた”スターライトmk?”の銃口から、一直線にレーザーが発
射されると同時に試合開始の合図が出て、観客席にいる観客（キラ
と千冬、真耶以外）は皆、シンにレーザーが直撃すると思っていた。

だが、歴戦の闘士であり、一年前まではキラと刃を交えて、そして
今ではキラを上官と慕い続け、共に死線をくぐり抜けてきたシンに

取ってはこのレーザーは何ら問題は無い。

余裕を持って躲すとアロндаイトを眼前に掲げ、光の翼を発生すると高速機動と無数の幻影を出しながらセシリアに突っ込んでいく。

「は、速い！」

それとこの幻影は何ですか！？

い、いえ……例えそれだけですわ！

踊りなさい！セシリア・オルコットと”ブルー・ティアーズ”の奏でる円舞曲ワルツで……！」

セシリアは驚愕しながらも、シンにスターライトmk?のレーザーを撃っていくが、”ヴォワチュール・リュミエール”による高速機動と”ミラージュ・コロイド”による幻影に翻弄されて、掠りもしない。どうやらセシリアは、”デステイニー”をその全身装甲から防御特化型のISと置いていたらしい。

だが残念ながら”デステイニー”は高機動全距離対応型のISだ。

ISの見た目だけでその性能を決め付けるようでは、これで良く国家代表候補生になれたモノだと、逆に感心してしまう。

「くっ！」

「はああっ……！」

すれ違い様に”アロндаイト”の鋭い斬撃がセシリアの腹部に当たる。

ビームの刃と実刃により、オートシールドが発生するが、その斬撃

はシールドを粉碎して直に当たり、”ブルー・ティアーズ”の絶対防御が発動。極端にシールドエネルギーを消費した。

これが意味する事は、後一回でもこれを受けると敗北する事と絶対防御が無ければ胴体が真っ二つになっていた、という事だ。

「くっ！」

これならどうですか!？」

セシリアは一旦シンとの距離を取ると腰部、つまりスカートの部分から四基のビット、つまりBT兵器を射出した。

だが、これまでにキラのドラグーンとライフルの同時射撃と大技であるドラグーンフルバーストを幾度も躲してきたシンに取っては脅威にはならない。

「ドラグーンか……。」

でも、キラさん並じゃないな」

”アロンドイト”を背中に納めて、両肩のビームブーメランを抜くと、カー杯投擲した。

回転する光の刃は、それぞれ過^{あや}た^まずに向かってくる四基のBT兵器^{ブルー・ティアーズ}を破壊しながら肩部に戻った。

「そ、そんなっ!？」

飛び道具を使わずにまさか一瞬で四基全てが破壊されるとは思っていなかったのか、セシリアは驚愕しながらも”スターライトmk?”からレーザーを迸らせるが、掠りもしない。

全てのレーザーを躲したシンは、いきなり上空に飛んでは右手に”アロンダイト”を逆手に握り、左手の掌部に光を”パルマ・フィオキーナ”を出しながら突進する。

加速の力に落下の力が加わったそれは、凄まじい破壊力を秘める。

そして、セシリアとの距離が後僅かにまで迫った時。

「かかりましたわね！」

”ブルー・ティアーズ”の腰にある残りの装備。

「ブルー・ティアーズは六基ありましてよ！」

腰部にあるスカートが動き、何かが発射された。

さっきまでのビットではなく、ミサイル弾頭型だ。

発射された所 セシリアの両腰 から”デステイニー”まで、余り距離がないがシンは慌てた様子を見せずに”パルマ・フィオキーナ”で突進していく。

「（ミサイルを避ければ隙を生み出す……。防御をしてもまた同じだ……。オルコットは恐らくその隙を見逃さない。なら……。）そんなの、破壊するだけだ！」

そう叫ぶと同時に、ミサイルと擦れ違い様に右手に持った”アロンダイト”を振るうと、ミサイルが真一文字に両断された。

「なっ、何ですって!?!」

まさかこの至近距離で、ミサイルを近接ブレードで一刀の元に斬り裂くとは予想していなかったのか、セシリアは驚愕を露わにするが、それはシンには隙以外の何でも無かった。

「止めだあああ！！！！」

「きゃあああああ！！！！！」

隙を突いた攻撃、”アロンダイト”の斬撃はスターライトmk？を両断し、”パルマ・フィオキーナ”は正確にセシリアの鳩尾に当たった。

それと同時に絶対防御が再び発生し、セシリアのシールドエネルギーは完全にエンプティになる。

試合開始からここまで僅か一分。

本来なら一夏の初期化、最適化が済むまで試合をしようと思っていたが、手加減無しで行けと言われた為こんなに速く終わってしまった。

だが手加減無しと言われてもシンやキラに取っては手抜きも良い所だった。

現にキラは驚いている観客に混じって、少し苦笑している。

「”ブルー・ティアーズ”。

シールドエネルギーエンプティにより”デステイニー”、シン・アスカの勝利」

「ま、まさかこのわたくしが一撃も与えられずにこんなに速くやられてしまうなんて……」

「アンタは慢心が酷すぎた。」

代表候補生だから、ISを操れるから、専用機を受領されてるから強い、負ける筈が無いなんて思っていたから」

「っ……」

「オルコット。アンタは確かに強い。けどその慢心を抱いた所為でアンタは強くなれなかった。」

アンタはアンタの守るべきモノを守る為に専用機を受領されただろ？
ブル・ティアーズ
ただどいつの間にかそれを忘れてしまっていた」

そう。シンの言う通り、セシリアは自分の守るべきモノを守る為に一心不乱に勉強や特訓を重ねていき、そして今の地位にまで上り詰めた。

だがいつしかそれを忘れていて、ただ男を見下すようになった。

シンは”アロндаイト”を背中に納め、右手をセシリアに指し伸ばす。

「アンタが初めの頃に戻って、自分が何の為にここまでになったのか良く思い出してみろ。」

そして、もっと強くなった”ブルー・ティアーズ”をオレやキラさん、一夏に見せて欲しい」

「……解りましたわ。」

わたくし、今から何の為にISを動かしてここまでになったのか良

く思い出して、そして、”シンさん”に認められる程のIS操縦者になってみせますわ!”

「……それは楽しみだ。

アンタならそれが出来る」

セシリアがシンの右手を掴み立ち上がるのを見届けると、シンは手を離すとブースターを吹かしてAピットに戻っていった。

一方、残されたセシリアは、朱に染まった頬を隠さず、シンの姿が見えなくなるまでその場に立っていた。

降臨する墮天使（後書き）

果てさて、キラには誰をしようかな……？

白い騎士の覚悟

シンがピットに入ってから、観客席は騒然としていた。

男性でISを動かせる数少ない存在の一人であるシン・アスカが代表候補生の一人であるセシリア・オルコットを僅か一分で下したのだ。

この女尊男卑の社会の中で、驚愕しない訳がない。

だがこの社会の中ではの話である。

その証拠なのかは解らないが、騒然としていたその中でただ一人、同じ男性でISを動かせる存在、キラ・ヤマトだけは平然としていた。

数多くの命のやり取りを繰り返してきた彼等、キラとシンに於いてはこの程度のレベルはまず当然の事だ。

ISはそのスペックで、兵器からスポーツになったが、そのIS主に専用機を託された事で力に持つ事への責任や覚悟等がどうも足りない。

ISがスポーツになったとは言え、所詮”兵器”なものには変わり無いのだ。

兵器を操る以上、相手の命を奪う事も、相手の全てを背負う事もまた覚悟しなければならない。

だが、ここにいる生徒全員がそれをしよう共、また理解しようとし

ない。

技術やパワー云々より、背負うか背負わないか、理解するかしないか、覚悟を決めるか決めないか、何かを守るか守らないかそれだけの差だ。

「ヤマト君。

織斑君が呼んでますのでAピットにまで来て下さい。
繰り返します」

「え？」

いきなりの真耶からの放送に、キラは首を傾げた。

さっきまでシンの試合 シンのちゃっかり手抜き試合 があったのに、今度はキラまで呼び出して何をするつもりなのか。

しかも呼んでいるのは一夏。

何かあったのだろうか。

今解っている事、といえば今こうしていても何も解決しない、という事くらいだ。

ともかく行ってみるしかない。

「何なんだろう……？」

キラは疑問に満ちた声を出しながら、Aピットの方角へと歩いていった。

時は少し遡る。

Aピットに着地したシンは、”デステイニー”を解除、学園の制服になると”白式”を展開したままの一夏に歩み寄ってきた。

「すげえな、シン！」

まさか代表候補生のオルコットに勝つなんてな」

「ああ、ありがとうな。一夏」

一夏からの賞賛に、シンは軽く笑みを湛えながら返す。

実際、デステイニー機体の出力やビームの威力、”ハイパーデュートリオンシステム”にかなりのリミッターをかけた上で単一仕様能力をやフジオフアヒリテイSEE Dを使わずに戦ったシンに取っては手抜きも良い所だが、まあそれはばれていないのでそれで良いだろう。

「アスカ。」

単刀直入に言うがアスカとヤマトはどっちが強いんだ？」

「え？」

キラさんの方が強いけど？」

あっけらかんと言うシンに、一夏と篤は思わず絶句しかけた。

シンは何も自分は変な事は言ってますんよみたいと言うが、一夏と

幕の推測と目線で見ると、シンの実力はリミッターをかけていても国家代表所かモンド・グロッソに出場する上位選手と互角に渡り合えるか、千冬と良い勝負をする程の実力だ。

実力に伴って、キラはシンよりも覚悟の程が強いのだが。

「一夏。今度キラさんと戦ってみれば？」

「……キラと？」

「ああ。」

勉強になると思うからな」

じゃあな、と言いつつ残すとシンはそのままシャワー室の方へと歩みを進めていった。

「キラと、か……。」

確かに勉強にはなるかも知れないな……」

「だが、アスカの戦いや操縦方法も勉強になったのでは無いのか？
実際にあの長刀型の近接ブレードも使ってたから」

「ああ。」

シンの戦闘スタイルは俺のと少し似ている。
あの光の翼を広げながらの幻影と高機動で翻弄しながらの自分の得意なレンジで戦うスタイルだ。

だけど、恐らくあの背面にある砲身とライフルからはロングレンジも得意、か。

勝てる気がしないな……」

実際、シンにある弱点と言えば、背面にある長射程ビーム砲を発射する際にある一瞬の隙位だが、シンはそれを熟知、また対策案も出しているだろう。

ロング、ミドル、クロスどのレンジを取ってもシンに弱点は無い。

そしてロングとミドルを取れば、確かに”白式”と少し似ている。

「問題はヤマトのISだ。

どのようなISを使うのか、どのような性能があるのか、それが解らん」

「ああ、つとそうだ。

山田先生、織斑先生。

ちょっと良いですか？」

時は戻り、再び交錯する。

キラがAピットに戻ってきて、一夏の元に向かう。

「一夏。

どうかしたの？」

「キラ……。」

俺と、戦ってくれ！」

「っ！」

一夏からの要望に、キラは僅かながらに目を見開くと、鋭い氷のような冷たい闘気と心臓を握り潰すような重圧を放出する。

学生モードから、戦士軍人モードにスイッチが切り替わった証拠だ。

「……………どうして？」

初期化と最適化を終えたらシンと戦ってクラス代表を決めるんじゃないの？」

「っ……………確かにそうだけど、俺はキラと戦いたい！」

キラの実力と一緒に、キラが何をしたいかを知りたいんだ！」

「っ！！？」

冷たい闘気と鉛のような重圧を一身に浴びながらも、キラと戦いたい、何をしたいか知りたいという一夏の決意に、キラは思わず目を見開いて驚愕した。

そして、それと同時に感じ取った。

一夏が専用機を貰って何の為に戦うか、何を守りたいのかが。

「……………解った。」

フォームット フィッティング
でも初期化と最適化が終わってからね」

「っ……………ああ！」

「……………本日の試合の変更を発表する。」

シン・アスカ対織斑 一夏の試合をキラ・ヤマト対織斑 一夏とする。
織斑の機体の初期化と最適化が終わり次第、二人を発進させるので、
それまで待機を命ずる」

千冬からの放送。

どうやら彼女も了承したらしい。

どっちにしろ暫く待つしか無いだろう。

「じゃあ、暫く話でもして時間潰そうか」

「あ、ああ。そうだな」

いきなり闘気と重圧を消しては微笑を浮かべるキラに、一夏はちょっと戸惑いながらも籌を交えてISについての話を始めた。

三十分後

話をしていた一夏達だが、いきなり”白式”の装甲が仄かに輝き始めた。

「ん？うわっ！？」

「これはっ！？」

「……」

驚く一夏と筭を尻目に、装甲は輝きの中でさつきまでの角張った装甲から、中世の騎士を思わせる純白のフォームとなっていく。

そして、輝きが完全に消えた時、”白式”は真の姿になった。

フォーマット フィッティング
初期化、最適化が終了しました。
確認ボタンを押して下さい

「えっと……」

「やっと、”白式”は一夏専用になったね」

キラはこう言っているが、一夏の思いは別の方向に向いていた。

近接特化ブレード”ゆきひらにかた雪片式型”

ウィンドウに映っているのは一振りの日本刀のようなブレード。

だが鎧には僅かに溝があるから何か特殊な能力でもあるだろう。

だが、そこじゃない。

そのブレードの名前だ。

キラは知らないが、一夏に取っては特別な思い入れのある名前だ。

「よし。ヤマト。」

先に発進して待っている。

織斑も直に発進させる」

「了解しました」

千冬からの指示に頷くと同時に、キラの胸元にあるペンダントが蒼く輝き出し、キラの体を包んでいく。

光に包まれて僅か0.3秒。

キラの顔面以外の全身は、暗い鉄灰色をした、”ストライクフリーダム”となっていた。

「シンと同じ全身装甲型!？」

「一体、ヤマトとアスカのISは誰が造ったんだ?」

一夏の驚愕と筈の疑問を尻目に、キラはカタパルトまで歩みを進め、足を接続させる。

「進路クリアー。」

システムオールグリーン。

カタパルト権限をヤマト君に譲渡!

ヤマト君、発進どうぞぞ!」

「キラ・ヤマト。」

”フリーダム”、行きます!」

キラがいつもの掛け声を言つと同時に、キラの体は真っ直ぐ外界へと吐き出されていく。

そして、いつも通りの鮮やかなバレルロールをしながらVPSを展開すると、その場に制止した。

何と無くだが、気合いを入れる為に一夏はキラとシンが発進する際に言う掛け声を真似したくなってきたのか、カタパルトまで足を進ませると、キラとシンが言ったような事を纏める。

「よし、俺も言ってみるかな」

「進路クリアー。」

システムオールグリーン。

カタパルト権限を織斑君に譲渡！

織斑君、発進どうぞ！」

「よっし。」

織斑 一夏！

”白式”、行くぜ！」

明らかに気合いが入った声で言うと同時に、一夏の体は外界に飛び出しては背中の中八枚の翼、スーパードラゴン機動兵装ウイングを広げ、両手に高エネルギービームライフルを構えたキラの前で停止、近接特化ブレード、雪片式型を構える。

「一夏、君が専用機で何をしたいのか、何を背負うのか、それら全部を教えて貰うよ」

「ああ、俺の持っているモノ、背負っていくモノ、これからの覚悟を全部お前にぶつける！」

キラの放つ闘気と威圧感を真っ向から受けながらも、強く言い切る

一夏。

その瞳には、学生とは思えない力強い光が宿っている。

「良い瞳をしているね。」

想いの方は合格、と言った所だよ」

「そうか。」

そいつは何よりだ。

じゃあ今度は力を見せる！」

圧倒的に一夏の方が劣っているのは、一夏自身気付いている。

だが、それでもキラにこれからの自分の覚悟を示す。

もう最早クラス代表を決める戦いではなく、自分達の持っているモノ、背負っているモノ、これからの覚悟をぶつけ合う戦いだ。

その決意の表れか、構えていた雪片式型のエネルギー刃を展開する。

「ではこれより、キラ・ヤマト対織斑　一夏の試合を始める！
では、始めっ！！」

試合開始の合図が鳴った瞬間、キラはいきなりハイマツトモードのままフルスピードで上昇しながら、両手に握ったライフルを矢継ぎ早に連射していく。

一夏も何とかトップスピードでビームですり抜けながらキラに近づいていこうとするが、避ける先を読んだような射撃の為に、接近する事が出来ない。

射撃の基本中の基本と言われている牽制射撃と本命射撃だが、それすら疑わしい。

だがこれでもキラに取っては手抜きも良い所だが、一夏に取っては地獄だ。

「くっ！このままじゃっ！！」

「僕の事を知りたいならこのくらいの射撃で止まってはダメだ！反撃するくらいの気骨を見せるんだ！」

ならば、と一夏は自分のシールドエネルギーが減少していくのを覚悟に、キラに近付くが、キラはそんなに甘くはない。

「甘いっ！！」

キラは射撃をしながら遠ざかっていき、更にドラグーンを全基展開させた。

「っ！誘導兵器！？」

その翼は誘導兵器だったのかよ！？」

「驚いている暇なんてないよ！」

ドラグーンを展開した事で発生した光の翼、”ヴォワチュールリュミエール”で更に速くなり、ドラグーンと両手のビームライフルから放たれるビームにより、一夏の攻撃は易々と躲されていき、また逆に一夏のシールドエネルギーがガンガン削られていく。

「”白式”、シールドエネルギー残量148」

「も、もうこれだけしか無いのかっ!？」

このままではキラの覚悟に自分の覚悟をぶつける事が出来ないまま負けてしまう。

キラが”ストライクフリーダム”で何をしたいのか、何を守りたいのか、そして一夏自身が”白式”で何を守りたいのか、そしてその覚悟があるのか。

それを知らないまま、そしてキラにぶつける事が出来ないまま。

そう思ったその時、見えた。

キラが放つビームの一箇所だけ、”白式”が通れるスペースが存在していた。

しかもそこから、キラまでの距離は余りない。

「ハアアアツ!!!」

一夏の咆哮と同時に、体が黄金のオーラを纏う。

単一仕様能力”零落白夜”発動。

あの自由時間帯で、キラが教えてくれた”白式”の単一仕様能力にして最強の力、バリア無効果攻撃。

相手のバリアの効力を無視して相手の機体に直接ダメージを与える事により絶対防御を発動。シールドエネルギーを極端に消費させる事が出来る、現行ISの中でもトップクラスの攻撃力を持つ攻撃。

だがその反面、自分のシールドエネルギーを大量に喰らう為に、使う場所に限られる。

「キラ！」

これが、俺の覚悟だああ！！！！」

「ハアッ！」

一夏が裂帛の声と同時に、バリア無効果の刃が振るわれる。

キラはそれに対し、体を翻す事で躲すと鋭い回し蹴りを”白式”の右腕部に仕掛けた。

「くあっ！」

鋭い衝撃により、一夏の体は地面へと落下、大きなクレーターを作り出す。

キラは、一夏の覚悟に応える為に、全力を持って制する為、一夏に向けてある大技の体制に入った。

腰部のレール砲の砲身を展開して前方へ、両手のビームライフルも同じく前方へ向けられ、展開していたドラグーンも周囲に集まり、砲口を前方に向ける。

これまで数多の敵を屠ってきた大技、”ドラグーンフルバースト”だ。

「一夏。

君の覚悟とこれからしたい事、伝わったよ。
今度は僕の番だね」

そう言うと同時に、十三もの光の矢が一夏に向けて降り注がれた。

降り注がれた光の矢は、過たずに白式の装甲に直撃。絶対防御を発動させて、シールドエネルギーをエンプティイにまで追いやる。

「”白式”、シールドエネルギーエンプティイにより勝者、”ストライクフリーダム”、キラ・ヤマト」

「糞っ……。
後少しだったのに……」

「けど、そう落ち込む事は無いよ。一夏」

クレーターの中央で、悔しそうに一夏に、キラがゆっくりと降りて来る。

「一夏。」

君の覚悟やこれからしたい事、伝わったよ。合格点だ」

「そうか……」

この刀、”雪片式型”は千冬姉が使ってた武器なんだ。

この刀と”白式”で千冬姉と同じように大切な人、その大切な人の大切なモノを守り抜く様になる。

例え世界を敵に回そうともな」

「……大丈夫。」

一夏なら、必ず守れる様になるよ」

「……そうか。」

キラ、シンに頼みが

「解ってるよ。一夏」

真剣な顔で尋ねる一夏に、キラが覆いかぶさる。

一夏の覚悟や何をしたいか解った時、決めた事だからだ。

「放課後は空けておかなくちゃね。」

後でシンにも言ってみるよ」

「っ……！サンキュー！！」

弟子入りを果たした一夏はISを展開した起き上がると、傾いていく太陽を見遣る。

その顔には、強い決意が滲んでいた。

翌日の朝のSHR

「という訳で、1・1のクラス代表は織斑 一夏君に決定しました
〜！」

パチパチとクラス中が拍手をしていく中、一夏はついて行けてない

のかポー然として、キラとシンはその一夏を見ている。

まあ、当たり前と言えば当たり前だろう。

昨日は負けた筈なのに、何故自分がクラス代表になったのか、疑問に思うだろう。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「シンは昨日オルコットに勝って、キラは俺に勝ちましたが、何故俺がクラス代表になっているんですか？」

「ああ、それはですね。

ヤマト君とアスカ君は織斑君との訓練に時間を空けなければならぬの、織斑君自身の経験を上げさせる為、と言っていました。

因みにオルコットさんは先週の事を反省して、織斑君に譲ったんです」

「は、はあ……………」

何とか納得したのか、一夏は生返事で返す。

これから訓練が始まっていくのだ。

頑張っ て行かなきゃと思った一夏だった。

平和？な日常（前書き）

どーでもいー事ばかりだなあ……。

平和？な日常

クラス代表決定戦から三日。

一夏とキラとシンの三人はクラスとも大分馴染んできて、今ではもう普通に女子も交えて会話も出来る様になったが、やはりここは女子高なのか、話題や視線の違い等で四苦八苦していた。

まあ、キラとシンの場合は恋人やガールフレンドがいたので一夏程では四苦八苦していないが、軍という世界で生きてきた為に一般人でのガールフレンドがいないので、合わせるのに少し気苦労した。

因みに一夏はクラス代表としての仕事はまだない。

千冬日く四月中はまだないが、五月からあるらしいとの事だ。

キラとシンの朝は、キラが作るモーニングコーヒーで始まる。

キラがコーヒーを混ぜる際、毎日同じのだとシンが流石に飽きるだろう、というので毎朝それぞれの豆の割合を変えたりしている。

シンが洗顔を終えた後にキラも洗顔に行き、コーヒーを飲みながら暫く雑談。

実はこの所為で二人は授業中居眠りしたりする事は無い。

コーヒーに含まれているカフェインが眠気を防止するのだ。

その後、寝間着であるアンダーウェアから学園の制服に着替え、授業の準備をしては部屋を出ると隣部屋の一夏と箒と合流。

「おはよう。一夏、篠ノ之さん」

「おはよう」

「おう、おはような。」

キラ、シン」

「……おはよう」

朝の挨拶をして、また雑談しながら余裕を持って朝食を取り、教室に入ると授業の準備するとまた雑談やISについての勉強。

途中で来たセシリアを混ぜて雑談や説明会、千冬と真耶が来る寸前までだ。

千冬が来た後に座れば出席簿スマッシュを喰らうし、真耶からお説教を貰うからだ。

暫く経つては千冬と真耶が教壇に立ち、キラや一夏達もそれぞれの席に座る。

「では、これよりSHRを行う。

今日は」

今日の一限目は古典だった。

「ヤバ……。」

オレ古典苦手なんだよな……。」

「古典、しかも今日は漢文……。」

シンとキラが教材を出しながらそれぞれ嘆きの声を上げる。

実はこの二人、ザフト軍人で白服と赤服と特務隊、それ以前にスーパーコーディネイターとコーディネイターなのに何故か古典や漢文が苦手なのだ。

”プラント”やオーブの生活が長い上に、工業カレッジや士官学校に通っていたからか、古典の読み方とか漢文の返り点や再読文字が何なのかを理解したり、またそれを読んだり書いたりするのが苦手だ。

というかコーディネイターや、それを上回る生命体スーパーコーディネイターでも苦手なモノは存在するので、完全な超人ではないのだ。

二人は二人で、周りの女子達が某マジシャン的に耳がでかくなった事と、心なしか目が血走っている事に気付いていない。

「「うーん……。」

どうしようか……?」「」

二人が同時に呟いた時だった。

「ヤ、ヤマト君。

教えてあげようか？」

「アスカ君。

教えるからちよつとこっちに来て？」

二人の隣にいた女子がこれがチャンスと言わんばかりに詰め寄ってきた。

だが無論、それは周りにいた女子にも聞こえていた訳で。

「ず、狡い！

私がヤマト君に教える！！」

「アスカ君！

私が教えるから！！」

周りの女子が一樣に騒ぎ出し、キラとシンそれぞれの席に動いていく中で、一夏とキラ、シンは少し身を引いた。

セシリアは初恋の相手であるシンの所へ行こうとするが、女子の壁に阻まれていく事が出来ない。

だがそれを見事に止めた勇者がいた。

「騒ぐな。静かにしろ！！」

我等が鬼教S…もとい担任教師の織斑 千冬である。

日頃の指導もあってか、騒がしかった教室がピタッと止まる。

「全く……。一々騒ぐな。」

ヤマトとアスカは隣の奴から教えて貰え」

「は、はい……」

「解りました……」

その後、二人はそれぞれ隣の女子から教えて貰う羽目になり、ちょっと苦戦しながらも少しずつ覚えていった。

周りの女子がキラとシンの隣の女子を殺気立った瞳で睨みまくっていたのは何が何でも秘密である。

二限目は体育。

ISを持つ者としては基礎体力を上げる為という意味合いで身体を鍛えておく、という事で必須な学業である。

キラとシン、一夏の男トリオの細マッチョ且つガッチリした身体つきを見た女子はというと……。

「……ヤマト君っ、アスカ君っ、織斑君っ！」

四限が終わって昼休みになり、昼食を取るべくキラとシン、一夏と
筈に別れてそれぞれ学食へ移動。

何故別れて食べるかは、一夏の特訓メニューを決めている時に本人
に聞かれたら意味が無いからである。

因みにシンは中辛カレーライスで、キラは炒飯定食である。

「それじゃキラさん。今日は……」

「うん。」

今日も昨日、一昨日と同じだね。
でも今日は……」

「あ、あの……」。

隣、良いかな？」

「ん？」

「は？」

食事を取りながら特訓メニューについての相談をしていた二人だっ
たが、そこに聞こえた女子の声に、二人は同時にそっちを向いた。

そこには、二人の女子がトレーを持ちながら朱に染まった顔のまま
立っていた。

胸元にある赤いリボン、青いリボンで三年生と同級生の一年生だと

というのが解る。

断る理由が無いので快諾すると、凄く嬉しそうな表情で挟むように隣に腰を降ろす。

因みに、キラとシン、一夏の人気の高さは男性且つ美形という事が手伝ってか、それぞれファンクラブが出来る程だ。

一夏はオールラウンドだが同級生が大半、キラもオールラウンドだが特に女性教師に、同じくシンもオールラウンドだが特に上級生が大半と、人気が絶大であったりするが、当の本人達は全く露知らずである。

更に本人達が知らない所でスーツに着替えるシーンやシャワーシーン等を盗撮されたりしているのはどうでも良い話である。

昼休みと午後の授業が終わり、放課後。

第三アリーナでキラとシンと一夏が二対一の特訓をしていた。

セシリアと箒もいるが、二人は少し離れた所で一夏の何処に注意点があるのかを探している。

「ハアアアッ！」

「甘いっ！」

「ぐあっ！」

”白式”を纏った一夏が”雪片式型”を構えて突っ込んでくるが、デステイニーを装着したシンが”アロンドイト”の刀身で流すと同時に注意しながら蹴飛ばす。

「くっそ……！」

「っと、一夏。

オレにばかり集中してて良いのか？」

「っ!？」

「こつちにもいるんだよ！」

「ハアアアッ！」

気付いた時には既に遅し。

キラの二本のビームサーベルによる刹那の斬撃が無数、一夏に襲い掛かる。

「はあ、はあ……。」

キラ、シン……。

二人掛かりは無いだろ……。」

「その事については謝るさ。

話を戻すけど、動きが余りにも真っ直ぐ過ぎるから、読まれ易いん

だ

「まあ、”白式”が近接戦闘に特化してるから仕方ないけど、余り無理に動かすと最悪骨折するから、一夏にあった動きを探すと良いよ」

「ほうほう」

「情けないぞ一夏。」

朝のSHRで私達があんなに教えただろう」

「そうですね。」

あんなにエレガントに教えてあげたのに……」

（（あの擬音語の嵐とかなり難しい数学的な説明で解る人なんていないと思う）（）

実際、筈の教え方かというと……。

『こつガキン！とやってだな……』

『クイって感じだ』

等。

セシリアの場合はというと……。

『そこで急停止して身体を10。傾けて右に旋回機動するのですわ』

等。

二人共通している所、それは一夏の頭では全く理解出来ない所である。

しかもこの二人、自信満々にこう教えるので全く意味が無い。

だからキラとシンがメインに教えているのだ。

その後、セシリアや箒にも教える事になり、セシリアの場合はキラが適任という事でキラが教えて、箒と一夏の場合はシンが教える事になった。

セシリアがシンの方が良いと駄々をこねたのは敢えて明記しない。

これに基本的な操縦を加えて大体暗くなるまで続ける。

特訓が終わると同時に、見ていたギャラリーもそれぞれ退散していく。

キラ達はそれらに一瞥する事も無くピットへと帰っていった。

夕食を食べ終えてはそれぞれ自室へと帰る。

そこから就寝したり、宿題したり、シャワーを浴びたり、他室に遊

びに行ったりと自由時間を過ごすのだ。

「お休み。一夏、篠ノ之さん」

「ゆっくり休めよ」

「おう、お休み」

「お休み」

それぞれ二人組に別れてはそれぞれ自室に入り、各々の時間を過ごし、明日を迎える。

このまま明日も何も起きなければ良いがと思うが、そう思い通りにならないのが世界である。

波乱が、すぐそこまでに迫っていた……。

異国から来た、猫と共に……

危なっかしさは世界一！？（前書き）

航空自衛隊のブルーインパルスと日本海軍、
神風特攻隊を見て泣いた俺がいる……

危なっかしさは世界一!?

桜の花びらがすっかり散った四月の下旬。

1・1の生徒全員が学園支給のISスーツを着用し、第二アリーナに集まっていた。

キラとシンもまた、例外ではない。

それぞれのパイロットスーツに似たスーツ、キラは深蒼と白、シンは真紅と白を基調としたスーツでお腹が出ていないタイプを着ている。

因みに二人のパイロットスーツは二人のISスーツを作った後、処分という名目で二人に返却して貰っている。

千冬曰く、二人の私物を勝手に処分するのは悪い、という事だ。

「では、これよりISの基本的の飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。」

ISを展開して試しに飛んでみせる」
指示を受けると同時に、一夏とセシリアが待機状態の”白式”と”ブルー・ティアーズ” 右腕のガントレットと左耳のイヤークラスを展開する。

初心者である一夏がもたつくと思っていたが、特訓の成果かセシリアと同じ0.5秒で展開出来た。

「一夏も大分慣れたか。」

ヤマトとアスカには感謝だな)よし。飛べ」

再び指示が降りると同時に、一夏とセシリアの二人が飛び上がり、飛行を始めた。

”白式”のスペックは”ブルー・ティアーズ”より上だと言うが、百聞は一見に如かず。”白式”の方が若干速い。

実際ISの急上昇は目の前に角錐を展開するイメージでやるらしいが、所詮イメージ。

自分でやりやすいのを見つける方が効率的で良いのだ。

一夏が不意に、後ろにいるセシリアに回線回線オーバーンチャネルで話し掛ける。

「セシリア。大丈夫か？」

「平気ですわ。一夏さん。

一夏さんの方も凄いですわね。

たった数日の特訓でここまで上手くなるなんて」

「……皆のお陰や」

照れ臭いのか、一夏の声が若干上擦る。

初心者である彼がここまで上手くなったのは、キラとシン、セシリアと箒が付き合っている特訓 キラとシンが大半を占めているのお陰なのと言つまでもない。

豊富な知識で彼にあつた教え方や、彼に合わせた戦闘行動の取り方、

更に教わった身の振り方等が今の一夏を支えている、と言っても過言ではない。

「一夏っ！」

いつまでそこにいる！

速く降りて来いっ！！」

「箒だ。

何してるんだ？あいつ」

いきなり聞こえた声にセシリアじゃないので、一夏はハイパーセンサーを駆使して地上の方を見てみた。

地上の方では、箒が真耶からインカムを奪って、何か叫んでいる。

真耶はインカムを奪われた事でオロオロしていたが、千冬が箒の頭に拳骨を叩き込む事で、箒は真耶にインカムを返してあげた。

「しっかし……。」

ISっていうのはやっぱり凄いな。

元は宇宙での活動を想定して造られたって聞いたけど、こりゃ納得だな」

「一夏さん。

ISは宇宙での活動の際に、数万キロ離れた所にある星の光で自分の位置を確認しなければならなので、ISのハイパーセンサーにとってはこれは大した距離じゃありませんわよ」

「ほうほう」

隣に来たセシリアからの説明に、一夏は軽く頷くと何と無く、ハイパーセンサーで篝の顔を見てみた。

篝の顔は眉間に皺が寄っていて、何か悔しそうな顔をしている。

恐らくセシリアに初恋の相手を取られそうな気がしているのだろうが、セシリアは全くその気はない。

なんせ、セシリアは運命の堕天使に心を奪われているからである。

何と無く、セシリアもハイパーセンサーを駆使して初恋の相手、シン・アス力を見てみた。

シンの表情は、一夏の操縦に満足しているのか、僅かに綻んでいる。

その表情を見たセシリアはそれだけでご飯が三杯食べれそうだった。

「織斑、オルコット。

私語は慎め。

これから急降下を実演して貰う。

オルコット、織斑の順番で降りて来い。

目標は地表から10センチだ」

「は、はい！」

今度はセシリアから順番に、急降下を実演する事となった。

セシリアの急降下は流石に代表候補生に選ばれた実力か、危なっかしさは存在せず、地表10センチの所で完全制止した。

「ふむ……」。

流石は代表候補生。

このくらいは朝飯前か」

「あ、ありがとうございます。シンさん」

「じゃあ次、織斑」

今度は一夏の番だ。

指示が聞こえたのか、一夏も急降下をして、一気に地上に降りる。

途中でバランスを崩しながらも、何とか姿勢制御をして着地。

結果は

「ふむ……」。

13センチか。

バランスが途中から崩れたり、姿勢制御をするタイミングが速い。まだまだだな」

「は、はい……」

「けど、最初はこれで充分だよ。一夏」

「そうそう。」

まだ良い方だよ」

「……ああ！」

ありがとうな。キラ、シン！」

千冬の厳しい指摘に沈みかけた一夏はキラとシンからのお褒めの言葉で元気付いたのか、笑顔で返事をする。

実際、今の一夏は基本的操縦に関してはクラスの皆より少し上なのだ。

今のクラスの皆は、特定の人物を除いてヨチヨチ歩きのひよっこと言っても良い。

ましてや一夏は皆よりもスタートラインが後ろの方だ。

それを既に追い越してる辺り、一夏にはかなりの才能が宿っており、その才能を開花させる為の努力は惜しまないというのが解る。

だが、それだけではないのはまだある人物達だけが見抜いているが、それは何なのかはまだ明記しない。

「よし、次はヤマト、アスカ。

ISを展開して飛行を実演。

こいつにタイミングや姿勢制御を教えてやれ」

「はい！」フリーダム」！」

「了解！」Destiny」！」

言われて二人はISを展開し、鉄灰色の装甲を身体に纏う。

「あれがヤマト君とアスカ君のIS……」

「すじょい……」。

まるで天使だね……」

「けど何で全身装甲なんだろ？」

クラスメートの殆どが感嘆の声を上げる中、二人の目の前にある画面が現れる。

「Generation

Unsubdued

Nuclear

Drive

Assault

Module」

「Gunnery

United

Nuclear

Deuteron

Advanced

Maneuver」

「頭文字の大文字、GU……NDA……M？」

「ガンダム……？」

「一体何なんだろ？」

「あれを付けるとヤマト君のは”ストライクフリーダムガンダム”
でアスカ君のは”Destiny”ガンダム”だね」

全くその通りである。

そして、二人は思考制御でVPS装甲を展開、ボディの色をそれぞれ変化させた。

ヴァリアブルフェイスソフト

「装甲の色が変わった!？」

「綺麗ねえ……」

クラスメートが感嘆の声を上げるが二人は全く意に介さずに空を見上げる。

「キラ・ヤマト。」

”フリーダム”、行きます!」

「シン・アスカ。」

”デステイニー”、行きます!」

そして二人はそれぞれ深蒼の翼と真紅の光の翼を広げ、見る者を魅了させるアクロバット飛行を始めた。

だがその飛行はただ美しいだけではない。

華麗ながらも一分の隙が見当たらず、それでいて無駄が無いのだ。

「すご〜い……」

「あの光の翼……」。

綺麗ですわ……」

「すげ〜……」

二人の飛翔に、クラスメートはそれぞれの感想を漏らす、千冬と真耶は冷静だった。

二人とも既にキラとシンの技量、二人の機体の性能を全てではないが知っているからである。

もちろん、特別な者が持つあの力もまだ知らない。

「ふむ……」。

もうこのくらいで良いか。

急降下をやれ。目標はこいつらと同じ10センチ。ヤマト、アスカの順でやれ」

「了解！」

最初にキラが実演する事になった。

キラは翼を広げた姿、ハイマツモードに移行したまま一瞬にして最高スピードに達しながらも急降下していく。

その場にいたクラスメートは一夏は箒、セシリアや千冬と真耶を除いて全員が地表に激突すると思っていたが、キラは地表から僅か0.5センチ浮いていた。

成功だが危なっかしさ満点だ。

「ヤマトにはこれくらいは余裕か。
次、アスカ」

シンも指示を受けるとキラと同じように光の翼を広げたまま最高スピードで地表に急降下。

キラと同じ地表から0.5センチ離れた場所で完全停止をしていた。

「ヤマト、アスカ。

危なっかし過ぎるからそれは止める」

「は、はい」

「り、了解しました」

「あ、あはは……」。

み、皆さんはヤマト君達みたいな事をしちゃダメですよ？」

真耶が濁いた笑い声を出しながら注意するが、実際の所あんなに危なっかしさ満点な急降下は誰もしようとは思わない。

熟練した者ならできるだろうが、それを学生であり、また一年生であるキラとシンが軽々とこなした事に、一夏は少し怖くなったがその反面、二人くらいに上手くなって、大切なものを守ってやる！と心に誓うようになった。

「次は武装を展開だ。

だがヤマトとアスカは最初から武装が出ているから、やらなくても良い。

織斑、オルコット。武装を展開しろ」

「はい！」

「はいですわ！」

千冬から指示が降りると一夏は右腕を左手で握り、セシリアは左腕を肩の高さまで上げる。

そして集中力が極限にまで達した時、二人の手には近接特化ブレード”雪片式型”、狙撃銃”スターライトmk?”が握られていた。

二人のここまでの時間、僅か0.5秒。

代表候補生であるセシリアから見れば普通だが、初心者である一夏から見ればかなりの快拳だ。

「ふむ……。流石は代表候補生。織斑は頑張ったな。

ただしオルコット。

そのポーズは止める。

銃身を横に展開してアスカを撃つ気か？」

「へ？」

言われてセシリアは自分の銃口の先を見てみた。

その先一直線には、背中を向けたシンがいた。

「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏める為に必要な」

「言い訳は受け付けん。

直せ。良いな？」

「はい」

流石のセシリアも千冬には敵わないのか、千冬の一睨みで押し黙った。

一夏の方は二人のアドバイスのお陰で短時間で展開出来た”雪片式型”のエネルギ―刃を放出しながら待っている。

だが一夏の心の中は珍しく自分を褒めてくれた姉の言葉に深い感銘を受けていた。

「次だ。」

オルコットは近接武器を出せ」

「は、はい！」

頭の中で言い訳を考えていただろうか、セシリアは少し反応に遅れながらも狙撃銃を収納し、代わりに近接武器を展開しようとするが、中々光が形にならない。

「まだか？」

「い、いえ……。うーん……。」

ああ、もう！”インターセプター”！」

漸くセシリアの手に近接武器、ショートブレードの”インターセプター”が展開されるが、如何せん遅すぎだ。

しかもこのやり方は、初心者コースとして教科書の最初の方に載っているやり方で、代表候補生であるセシリアに取ってはかなり屈辱

だった。

「何秒待たしている。

お前は実戦で相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では間合いに入らせませんから、問題ありませんわ！」

「ほう？」

誰かさんとの戦いで、簡単に間合いに入らされた上、簡単に撃墜されたのは何処の誰かな？」

「うっ……」

前の事を掘り出されたセシリアは、再びグツと押し黙る。

実際、あの時誰かさん シン・アスカ はビームライフルやビーム砲を使わずにミドル、クロスレンジで戦って勝った。

遠距離が得意だからと言って、長所だけ伸ばしても意味が無い。

「よし、今日の授業はここまでだ。

次の授業に遅れるなよ。解散！」

パァン！

千冬が手を叩く音がそこら辺に響き、授業は終わった。

「一夏、シン。行こう」

「オッケー」

「了解です」

男トリオはそれぞれISを解除すると、皆と別れて別の行為室に向かった。

危なっかしさは世界一!?(後書き)

うーん……。

無人IS何にしよ……

龍を纏った猫登場！（前書き）

ガンダム00のスペシャルエディションと劇場版を見ました。

感想は、見事なくらいに涙腺崩壊。

龍を纏った猫登場！

初の実技訓練の昼休み。

キラとシンは千冬に呼ばれ、職員室に来ていた。

「ヤマト、アスカ。」

織斑の事だが、最近どうなんだ？

まあ、あいつの今の実力ならかなり成長しているから大丈夫と思うが、お前達の希望について行けてるレベルか？」

「一夏の事なら大丈夫です。」

最近はかなり速度で上達して、もう本当にスタートラインが後ろか？と思えるくらいに」

「まだ最初だからか、まだ荒削りな部分も見受けられますが、代表候補生とそれなりに渡り合える実力です。」

それと」

「皆まで言うな。ヤマト」

キラの声を、千冬は口と手を持って制す。

「あいつはああ見えて強い意思と覚悟を持っている。」

今の女尊男卑の世界ではあいつははっきり言って異端だ。

万一の時は、お前達と共に世界を相手に戦うだろう」

千冬のきっぱりした厳しい声。

だが、その中には弟を心配する姉の声が混じっている。

だが、そこから感じ取れるのは世界を相手に戦う時、自分はどっちに着くかという迷いも見える。

姉としてはらしいと言えはらしいが、逆に千冬としてはらしくない。常に即断即決である千冬の迷い。

人として迷うのは当たり前前迷ってばかりではダメだ。

時としては非情な判断を下さなければならぬ。

「では、僕達はこの辺で」

「ああ、また明日な」

「はい」

「失礼します」

一礼して、キラとシンは職員室から出て行った。

職員室から出たキラ達は、さっきの千冬の事については触れようとせず、これからある事に思いを馳せていた。

「そういえば、キラさん。
オレ達、確か布仏から何か誘われてましたよね？」

「うん。」

確か、寮食堂の一角を借りて一夏のクラス代表の就任パーティーだったね」

「はい。」

キラさんはコーヒーの魔法瓶^{ポット}、持って行きますか？」

「持つて行くつもりだけど。」

シン、ジュースじゃなくてコーヒー飲むの？」

確かにキラが言う通り、シンはまだ若い。

毎朝キラお手製のモーニングコーヒーを飲んでいるとは言え、シンの年齢ではコーヒーよりジュースが合うだろう。

「ジュースも飲みますけど、コーヒーはジュースが飽きた時に飲むかと思ってます」

シンらしいと言えばシンらしい理由だ。

「……………解ったよ」

キラとシンはそれぞれ苦笑しながらも、食堂と自室へと歩いていった。

食堂に着いた二人は、それぞれの席に腰を降ろす。

既に寮の食堂は一年一組の皆が全員私服で揃っていて、その真ん中に主役である一夏が座っている。

テーブルにはそれぞれお菓子やジュース等が置いてあり、自由に食べたり飲んだり出来るようになっていた。

因みに一夏は白のTシャツに黒い半ズボン、キラとシンはそれぞれザフトの白服と赤服だ。

しかも「丁寧に”FAITH”の徽章までも着用している。

「よっ。キラ、シン」

「ゴメンね。少し遅れた」

「私服か制服でオツケーて聞いてな」

「まあ、まだ始まってないから大丈夫だぞ。

にしてもキラとシンの服ってカツコイイよな」

「はは、ありがとう」

確かに、二人のザフト制服姿はそれぞれ似合っている。

その所為か、周りの女子達も、二人の服装にうっとりしている。

「はあ……。
織斑君に続いてヤマト君とアスカ君のあの服、色違いだけどスツゴく似合ってる……」

「あの銀色の羽根のバッジが綺麗だね……」

「何処で買ったんでしょう？
気になりますわね……」

「はあ……はあ……」

部屋に押しかけて部屋着を着たまま……ジュルリ……」

「……っ!?」「」

何か厭らしい幻聴らしいものが聞こえたと同時に、三人の背中に何か物凄く冷たいものが走ったが、気の所為と言いついて聞かせて席に座った。

席順は、一夏が真ん中で左にシンとセシリア、右に箒とキラの順である。

「それでは織斑君っ！

クラス代表決定おめでとう……!」

「おめでとう……!」

パンパンパンパーン!!

カチャーン!!

一斉にクラッカーが鳴り響き、グラスで乾杯するとパーティーが始まった。

「えっと、ありがとう」

一夏はただどしく礼を言っが、キラとシンは全く動じていない。

「頑張つてね、一夏。」

僕とシンも出来る限り手伝うから」

「そうそう。」

困った時はいつでも言いに来てくれよ。
相談相手くらいなら出来るから」

「ああ、ありがとうな。」

キラ、シン」

男友達二人からのエールに、一夏は若干落ち着いたのか朗らかな笑みを称えながら礼を言っ。

だが、筈にとっては自分に見せない朗らかな顔に少しムスツとしていた。

実際、ここ最近の一夏は筈と余り話さない。

離す事と言えば挨拶か授業の予習復習くらいだ。

男女七歳にして同衾せず、という言葉があるが、それが少し寂しかった。

(よし、これからは私もアタックするぞ！)

篤が決意を露わにした時だった。

「はいはい、新聞部です！」

話題の新生生の織斑 一夏君とキラ・ヤマト君とシン・アスカ君の取材に来ましたあ〜！」

眼鏡をかけた一人の女子が乱入してきた。

胸元にある黄色のリボンを見ると、二年生だ。

一夏は軽く驚いているが、キラとシンは既に予測していたのか驚いていない。

IS学園に入学した男子生徒というので、しかもクラス代表という事を少し考えれば予測出来る。

「私は二年生の新聞部副部長、未ゆすみ黛かおる薰子よ。よろしくね。はい、これ名刺」

キラとシンと一夏はそれぞれキラお手製のコーヒーを片手に名刺を貰う。

少なくとも三人の内一人は先に名前を呼ばないと解らないだろう。

「にしてもそのコーヒー、良い匂いするわね。ちよっと貰っても良いかしら？」

「え？どうぞ」

キラは近くに置いてあった余りの紙コップを取ると魔法瓶のコーヒーを入れて、薫子に渡し、薫子はそのコーヒーにブラックのまま喉に流し込む。

「いただきます。」

……うーん、ブラックでも美味しいね。

誰が煎れたの？」

「僕です」

「ヤマト君が煎れたの？」

若い人にも人気になるくらいよ？これ」

「そうですか？」

無自覚とは何とも恐ろしいものである。

そしてその言葉に女子の目がキュピーンと光ったが、華麗にスルーである。

「さて、美味しいコーヒーを飲んだ所で！」

織斑君っ！クラス代表になった感想をどうぞっ！！」

「え？ええ？」

まあ、頑張ります」

「え？それだけ？」

まあ良いや、そこは適当に捏造するとして」

捏造というメディアの歪みを見てしまったキラとシンの目が、一瞬間になりコーヒーやジュースを吹き出しそうになるが、それすら尻目に今度はキラとシンにマイクレコーダーを向ける。

「さて、それではヤマト君とアスカ君っ！」

どうしてクラス代表を降りちゃったのかな？」

「え？」

一夏は才能やそれを開花させる為の努力とかは惜しまないけど、経験上まだ足りないのでクラス代表を譲った、という理由です」

「無論、オレ達も一夏を日陰となり日向となり支えていくつもりです」

「お〜……。」

こりゃ捏造の必要がなさそうね〜」

渋々みたいな表情でメモっていく薫子。

てかそんなに捏造したければ、隣国に行けば良いのではないのか？

薫子は今度はセシリアにマイクを向ける。

「では次はセシリアちゃんね。

アスカ君と戦って負けちゃったけど、何か思う所とかある？」

「わたくし、こういった事はあまり好きではないですが、仕方ないですね。」

わたくしは確かに負けましたわ。

けどシンさんと戦って」

「ああ、長くなりそうだから良いや。

テキストに捏造してアスカ君に惚れたという事にしとくから」

「さ、最後まで聞きなさい！！」

怒鳴るセシリアだが、途中でチラッとシンの方を見てみた。

シンはコーヒー片手にキラと一夏と楽しそうに談笑している。

セシリアの心はホツとするが逆にちよつと残念そうな超複雑な色に染まってしまった。

「じゃあ最後に、専用機持ち全員で写真撮るよ。

あ、四人で中央に手を繋ぐようなのが良いな」

「「「「あ、はい」「」「」

四人は早速言われた通りに並ぼうとした。

(キラさん。キラさん)

(何?)

(シンさんの隣になりたいのですが、よろしいでしょうか?)

(シンの隣になりたいの?)

良いよ)

(GJグッジョブですわ、キラさん!!)

内心ヒヤッホーイと叫んで踊りだしたい衝動に駆られながらも、セシリアはシンの隣に並んだ。

列は右から一夏、キラ、セシリア、シンの順番である。

「じゃあ撮るよ〜。」

じゃあ、はい、チーズ」

カシヤツ！

「……何で」

「……全員」

「……入って」

「……いるのですか!？」

シャッターが切られる瞬間、恐るべき行動力を持って女子が全員写真の枠に納まっていた。

箒は箒で一夏の方を睨んでいて、セシリアはキラに頼んでシンの隣になったのにこれでは流石にダメである。

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの良い思い出になって良いじゃん」

セシリアを丸め込むような事を口々に言うクラスメートに、セシリ

アはまるで苦虫を百匹程噛み潰したような表情になった。

その後、織斑 一夏クラス代表就任パーティーは、夜十時まで続いて、キラのコーヒーはその後、クラスメイト全員に飲まれて殆ど無くなってしまい、また混ぜなければならなくなった。

翌日。

一夏の席で話していた三人の所に、一人の女子がある情報を持って割り込んできた。

噂が大好きな女子というべきなのか、情報が入ってくるのが速い。

「ねえねえ、ヤマト君、アスカ君、織斑君。

二組に来た転校生の事聞いた？」

「「「転校生？」」」

「そうそう。」

「何でも中国からきた代表候補生だって」

代表候補生だというのは解るが、何故こんな時期に転校してきたのが解らない。

今は4月の下旬であり、ここに入ってくるなら転校ではなく最初から入学する方が効率が良い。

おまけにここ、IS学園に転校する条件はかなり厳しい。

ISの強さは勿論、知識や教養、更には国からの推薦が無ければ入れない。

何となく、三人の頭の中にその転校生のせいで、中国の高官が東奔西走している場面が映った。しかも代表候補生と言えば

「あら、わたくしの存在を危ぶんで今頃の転校ですか」

やっぱり来た一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

「だが、一組の生徒ではないのだろうか？

そう気にする事ではあるまい」

いつの間にかやって来た箒。

箒の席は一夏の席からかなり離れているのに、どうやって来たかは敢えてのスルー。

「そして一夏。

お前は他の女子を気にしてる暇等無いのだぞ？

クラス代表対抗リーグまでの時間、解っているのか？」

「解ってるよ！

解ってるからキラとシンと話してたんだろ」

「織斑君が優勝したら皆幸せだよ〜！」

女子がハイテンションなのは理由がある。

その理由は、そのリーグ戦で優勝すれば、そのクラス全員に学生食堂のデザートのお菓子が半年間フリーパス券が貰えるからだ。

スイーツが好きな女子なら必ず食いつくだろうが、男の一夏がそれに食いつくとは思えない。

「専用機持ちはうちらと四組だけだから楽勝だよ〜」

「その情報、古いよ」

ふと、この中にいる誰かの声とは違う声が教室の扉の方からしてきた。

そこには、長い黒髪をサイドアップテールに結んだ小柄の女子が、不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「悪いけど、二組の代表も専用機持ちがなったの。そう簡単に優勝させられないから〜！」

周りの皆は困惑する中、一夏だけが反応が違った。

まるで昔別れた旧友に再会したような顔をしている。

「鈴……。お前、鈴か!？」

「そつよ〜！」

中国代表候補生、ファン 凰 リンイン 鈴音。
今日は宣戦布告に来たわ！」

新たなる波乱の幕開けが、この少女と共にやって来た。

龍を纏った猫登場！（後書き）

え、この度今日で私、白銀の翼がここで小説を書きはじめてから一年が経ちました。

これからも精進していくのでよろしくお願いします

異国からの波乱（前書き）

……くせじや、や

異国からの波乱

突如としてやって来た二組の代表兼中国の代表候補生、鳳^{ファン} 鈴音^{リンイン}の登場により、一組の教室は水を打ったような静けさが支配した。

キラとシンは唾然としながら鈴音を見ているわ、セシリアはあら？ というような目で鈴音を見ているわ、箒は一夏の様子から知人、しかも初恋の女子という事を察したのか殺気まじりに睨んでいるわだ。だが、その空気は見事にぶち壊された。

他ならない、織斑 一夏によつて。

「何カッコつけてんだ？
すっげえ似合わねえぞ」

「なっ！」

何て事言つたのよ、アンタ！？」

どうやらこつちの方が標準^{デフォルト}のようだ。

さっきのは何処となくだが、引つ掛かる所があつたのだ。見た目はかなり元気そうなのに、そんなカッコつけた挨拶の仕方ではまずダメだ。

退かれる事間違ひ無しだというのが目に見えて解る。

「おい」

「何よっ!?!」

パンツッ!!

「いだっ!!」

低い声と共に軽快な音が響き渡り、鈴音はその音が鳴った頭を抑える。

我等が担任、織斑 千冬の登場だ。

「もうSHRの時間だ。
それと扉の前に立つな。
邪魔だ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。
速く行け。邪魔だ」

「は、はい!!」

……逃げないでよ!!—夏!!—」

そう言い捨て、鈴音は自分のクラス1・2の教室に入っていった。

「嵐みたいな娘こですね……」

「確かに……（しかもシンに似た性格みただから、確実にシンとぶつかりそう……）」

ゴスツ！ゴイン！

シンの頭にキラの拳骨、鈴音の頭に一夏の拳骨が振り落とされる事で喧嘩、強制終了。

『うおおお……………』

『い、痛た……………』

「はあああ……………」

喧嘩が起きようと起こらないにしても、どっちにしろ止めるのはこの中で最も年上のキラだろう。

席についたキラは、隊長兼”FAITH”に着任して以来、吐いた事の無いため息を吐いた。

「お前のせいだっ！！」

昼休みになり、昼食を取るべくいつものグループで食堂に向かって

いく中で、箒が一夏に文句をぶちまけていた。

実は、箒はあの鈴音が来た事によりずっと授業に集中出来ず、午前中だけでも千冬に五回叩かれて、真耶から二回も注意を受けたのだ。

千冬の前でボーツとするのは、最高級の肉を背中に付けたまま獰猛な肉食動物とエンドレスな鬼ごっこをするような行為だ。

まあ、簡単に言えば酷く危険で、誰も真似しようとは思わない行為だという事だ。

「まあ、言い訳なら飯食いながらも聞いてやるから。キラとシンも今日は一緒に食おうぜ」

「え？」

うん、良いけど」

「オレも賛成だ」

そう言っつてはそれぞれ食券を買っつ。

一夏は酢豚、箒はきつねうどん、セシリアは洋食のランチセット、キラは和食の焼き魚定食、シンは炒飯定食だ。

「待ってたわよ！一夏！！」

ドーン！と戦隊物よろしく一夏達の前に立つのは、二組の代表兼中国の代表候補生の凰 鈴音だ。

後ろの方でポーン！と銅鑼の音が聞こえてきたのは気のせいだろ

う。

というか気のせいであって欲しい。

因みに、決して一夏達は悪役ではない。

「鈴。ラーメン伸びるぞ」

「う、うるさいわね！」

アンタが早く来ないからでしょ！！」

() () 嫌、昼休みに教室に来て誘えば良かっただろ(でしょ)！？
()

キラとシン、一夏は口には出さず、心の中でツッコミを入れた。

「ま、まあ良いや。

鈴も一緒に食おうぜ」

「まあ、良いわよ」

いつものメンバー(キラとシン以外)は、今日は鈴音も混ぜて食べるように決めると、それぞれ同じテーブルに腰を下ろし、それぞれ食べはじめ。

筈が何やら面白くないような表情をしていながら食べているが、そこはスルーである。

「にしても久しぶりだよな、鈴。
いつこっち来たんだ？」

「どうやって代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。」

「アンタこそ、何でISを動かしてここにいるのよ？」

「お陰でニュースを見た時ビックリしたわ」

「嫌、俺もあの時正直動かせるとは思わなかったからな」

「一夏が言うあの時。」

その時こそ、一夏の人生のターニングポイントだった。

キラとシンがこの世界に転移する前、私立藍越学園の受験本番を迎えた一夏は、試験会場で迷ってしまったのだ。

と、その迷った矢先、一つの部屋にあったモノに触れて今、このIS学園にいる。

「部屋にあったモノというのは言わずもがな、」打鉄「……つまりISである。」

「というか藍越学園とIS学園はかなり似ていて間違えやすいのでそこらへん要注意だ。」

「一夏、そろそろこいつの事を教えて欲しいのだが」

きつねうどんを粗方食べ終えた筈が、刺のある声で聞いてくる。

キラとシン、セシリアは我関せずと言ったように、昼食を続けている。

だが、シンは炒飯定食を食べながら面白そうに言ってみた。

「もしかして付き合ってるとかだったりして」

「なあっ！？本当か、一夏！？」

「っ！？べ、べべべ別に付き合ってるんじゃない…！！！」

「そうだぞ、シン。」

何言ってるんだ。鈴とはただの幼馴染みだ」

狼狽する鈴音だが、一夏の『ただの幼馴染み』の単語に不機嫌な面になり、箒は逆に安心したような表情になる。

このやり取りで解った事は目の前にいる中国娘は、一夏にホの字だと言う事だ。

だが、一夏に恋心を抱いている乙女の前でそのような台詞を言っただけは逆に傷付くだけ。

正直ここまで恋心に鈍いと、一夏は将来結婚出来るのか本気で心配になってきたキラとシン。

「幼馴染み？」

「ああ、箒が転校していったのは小学四年生の時だろ？」

鈴はその入れ違いの小学五年生から中学三年生まで一緒だったんだ。

鈴、こっちは篠ノ之 箒だ。俺と織斑先生が通っていた篠ノ之神社の神主さんの娘だ」

「ふうん。」

これからよろしくね」

「ああ、こちらこそな」

笑顔で挨拶をする二人だが、二人の間には火花が散り、背後には龍と虎が睨み合って……おらず、代わりに阿修羅と帝釈天が睨み合っているのが見えているのは、気のせいだろう。

（（修羅場だな……。一夏……））

一夏の余りの朴念仁振りとこれから起こるであろう修羅場に、二人は心の中で黙祷をした。

「んんっ！

わたくしの事をお忘れになっておりませんか？ 凰 鈴音さん」

「……………誰？」

「んんっ！

知らないのですか！？」

イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを！？」

また始まったセシリアの代表候補生自慢。

これすら無かつたら、もつと友達が出来て、墮天使を振り向かせる事が出来るのに酷く残念である。

「あたし、他の国に興味ないから」

「なっなっ……!？」

わ、わたくしは貴女のような方には負けませんでしてよ!？」

「でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いし」

これは強がりでも何でもない。

素でこんな強気発言をしている。

しかも確信じているから嫌味が無い。

箒は箸を置いて、セシリアはワナワナと震えている。

キラはムスツとしているシンを軽く小突いては宥めている。

「あ、そうそう。」

鈴、こいつらが俺と同じISを使える男子だ。

茶髪でアメジストの瞳がキラ・ヤマトで、黒髪でルビーの瞳がシン・アスカだ」

「キラ・ヤマト。よろしくね」

「シン・アスカだ」

「よろしくね」

余り興味が湧かないのか、素っ気ない返事を返す鈴。

「一夏。」

あんたクラス代表って聞いたけど？」

「ああ、まあ成り行きで」

「ふーん。」

あ、あのさー夏、今日の放課後何処か行かない？

あの駅前のファミレスとかさ」

「あそこだったら去年潰れたぞ。

それに悪いけど今日もISの特訓があるから行けないな。

クラス対抗戦までには皆との差を何とか埋めたいし」

今の一夏の実力は実際の所、キラとシンの特訓のお陰で代表候補生と互角に渡り合えるくらいで、余程の事が無い限りは負けない。

だが”白式”の戦闘スタイルが短期決戦型なので長期戦になると、どうしても負けてしまうのが悩みだ。

”白式”を開発した倉持技研が”白式”の他の武装やパーツを組み込もうとしているが、白式が全くうんともすんとも反応しないのでダメだ。

「じゃあ、それが終わったら行くから空けといてね。

じゃあね、一夏！」

いつの間にかラーメンを食べ終えた鈴音は、食器を片付けて行ってしまった。

その場には呆気に取られた一夏と、真つ黒いオーラを纏っている筈、苦笑しているキラとセシリア、ムスツとしているシンが残された。

放課後の特訓と勉強会、夕食と宿題や予習復習を終えたキラとシンは、それぞれザフトの制服に着替えると自室でパソコンを見たり愛機の整備を行っていた。

正確に言えばキラはこの世界で十年前に起きたISが世界に広まったきっかけ、”白騎士事件”を見ていて、シンは”デステイニー”の単一仕様技能をチエックしている。

白騎士事件。

ISが世界という名の檜舞台に立った事件であると同時に、ISの脅威を世界に広めたきっかけだ。

ディスプレイに映るのは、その内容と映像。

当時、日本を攻撃可能範囲に置いてある世界各国の軍事施設から、合計2341発のミサイルが日本を目標に発射された。

これは国の思惑云々ではなく、何者かにハッキングされてしまい、ミサイルが制御不能に陥ってしまったのだ。

各国が絶望に包まれる中、現れた。

中世の鎧のような白銀の装甲に覆われた一人の人影、”白騎士”。

右手に握った剣で発射されたミサイルの半数、つまり1221発を斬り落とし、また残りの半数を世界各国でまだ実験段階にある試作大型荷電粒子砲を召喚し、破壊した。

音を超える速さの近接戦闘、粒子から物質を構築する、更に世界でまだ開発段階にある光学兵器。

その脅威に対して世界は、偵察の為の戦力を日本に派遣。

最新鋭の機体までも出撃していったが、結果は変わらなかった。

強固な装甲とシールドによって”白騎士”の損害は0、世界は戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を撃破、または無力化された。

だが、それだけの損害を被っても、死亡者は0。

キラは隊長に着任されてあの事件までは相手を生かしたまま無力化させていたが、それは実際キラ程の操縦技術が無いと無理だ。

相手と相当な余裕が無いと出来ない。

だが”白騎士”はそれをやったのだ。

”白騎士”は日没と共に突然姿を消した。

まるで最初からそこにいなかったように。

生かしたままの無力化、高性能のステルス能力。

それはもう事件ではない。世界への嘲笑だった。

だが、キラはそんな説明を全く見ていなかった。

見ているのは操縦者と真犯人だ。

”白騎士”の操縦者は顔をバイザー型のハイパーセンサーで覆い隠されているが、その戦闘スタイルからは誰なのかが特定出来る。

織斑 千冬。

前に戦った時とこの映像を見ていると動きが余りにも酷似し過ぎている。

戦った事があるキラ、見た事のあるシンなら解る。

これだけは断言出来る。

更にこの真犯人はISの開発者である篠ノ之 束だ。

あれだけのスペックを持つISを開発した彼女なら軍事施設のコンピュータにハッキングする事等、ベニヤ板に穴を開けるくらい簡単だろう。

更に彼女達はまだこの時は十代前半。

身体や能力があろうとも、精神力はまだ幼かっただろう。

未来がこうなってしまった事を、当時考えてすらいなかったらしいのだ。

何故ISを開発し、その試験テストに協力したのかは今はどうだって良い。

過去よりも、今を見据えなければならない。

キラはパソコンを再び弄り、データをUSBに保存した。

一方、”デステイニー”の整備を終えて二人の機体のチェックをしていたシンは、ある投影画面ディスプレイを目にしていた。

それには

単一仕様技能ワンオブアビリティではなく、複数仕様技能ブーロウオブアビリティ。と映し出されていた。

単一仕様技能は、ISと操縦者との相性が最高値に達した際に発動する、その名の通り機体にある一つの能力で、第二形態から出来るようになる。だが、キラとシンの専用機、”ストライクフリーダム”と”デステイニー”は第一形態でそれが出来て、更にはそれが複数存在するのだ。

一夏の”白式”も第一形態で単一仕様技能が使えるが、それを複数持つのは世界でもキラとシンの二人だけだ。

因みにこれは学園上層部や千冬達には一切知られていないし、国際IS委員会もまた然り。

知られたらまず強制的に調べられるだろうが、そうならば力尽くで守るまでだ。

これまで相棒に守られてきたが、今度は自分達が相棒を守る。

シンは改めてその決意を表した。

その時、

「キラさん。何か聞こえませんか？」

「そういえば、何か聞こえるね。一夏の部屋からだ」

隣の部屋 一夏の部屋 から何か言い争っているのが聞こえてきた。

声から聞いて解るのは鈴音と箒だ。

鈴音は鈴音で唯我独尊な性格で、箒は箒で人一倍頑固な性格だ。

言い争っている話題は解らないが、隣に迷惑だというのは変わらない。

「ちょっと注意してくるよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

キラはパソコンの電源を落として部屋から出て行った。

異国からの波乱（後書き）

単一仕様技能が一つに絞れないからって、複数にする事無いだろ、俺……。

まあ、それは置いてアンケート取りたいと思います。

アンケート内容は鈴音VS一夏の時に現れる無人ISです。

それをモバイルスーツ（本編の機体のみ）かそのままゴーレムにしようか、というのです。

締め切りは今日から8月15日17:00までです。

戦いの狼煙（前書き）

えと、アンケートの点ですが、あくまでSEED、SEED DE
STINY本編に登場した機体のみで、MSVやスターゲイザーの
機体は一切受け付けませんので悪しからず。

前は とか出て来ましたので……。

戦いの狼煙

パァンッ！

キラが一夏の部屋に入ろうとドアノブに手に掛けた時、部屋の中から何かを叩く乾いた音が聞こえてきた。

「ん？」

『最低！』

女の子との約束を忘れるなんて男の風上にも置けない奴！
犬に噛まれて死ね！』

原因が何なのか調べようとドアに耳を当てようとすると、聞き覚えのある声が聞こえてきたと同時に、中から鈴音が出て来たが、鈴音はキラの存在に気付かなかったのか、キラには見向きもしないでそのまま去って行った。

開け放しの扉からは、右頬を抑えた一夏と唾然とした箒が突っ立っているのが見える。

ともかく、今のままじゃ原因が解らないので聞こうとした。

「鳳さんが凄い勢いで出て来たけど、何があったの？」

「……………ああ、キラか。
実は……………」

「成る程……」

一夏からの説明によると、鈴音がいきなりポストンバグ一つで部屋に乗り込んできて、部屋を箒と変えてと言ったら箒とやんやんやの口喧嘩になっていった。

その口喧嘩の最中に鈴音が昔に交わした約束を聞かれて覚えている限り話したのにいきなりひっぱたかれて罵声を投げつけられて今に至るらしい。

「昔交わした約束の事、か……。
何なのかは解らないけど、彼女にとってはかなり大事な事だったんじゃない？」

普通の約束事でそこまで怒る事なんてまず有り得ないし」

「なら、その大事な事って何なんだよ？」

「それを解決するのは一夏だよ。
正直僕達にも聞かれても困るし、このままにしても行けない。
僕が言えるのはそれだけだよ」

そう注意を残し、キラは部屋から出ようと背中を向けるが、途中で何かを思い出したように後ろを振り返る。

「言い忘れてたけど、喋るんなら近くににいる人も考えて欲しい。
隣人に迷惑だから」

ガチャ、パタン……

最後に厳しい視線と言葉をかけるのを忘れず、キラは部屋から出て行った。

出て行った直後、一夏と篝（特に篝）は申し訳なさそうな顔をしたのは、キラは知らない。

「ふう……」

部屋に戻ったキラは、ザフトの白服をハンガーにかけて、アンダーウェアに着替えると真っ直ぐ自分のベッドに身を投げ出した。

シンはシンで疲れた上にやる事が無くなったのか、自分のベッドで熟睡している。

「これから……大変だな……」

五月にあるクラス対抗戦は、キラの誕生日である十八日のある週に始まる。

誕生日のあるキラにとっては少し嫌な週だが問題はそこじゃない。

もっと大きな問題がある。

一夏と鈴音の仲だ。

このまま二人の関係が悪化したままだと、どうなるかは火を見るより明らかだ。

だけど、これは一夏の問題であって、今の自分達にはどうする事も出来ない。

出来る事と言えば、一夏が無様に負けないように鍛え上げるくらいだ。

「よつと……」

ふと、キラは身体を起き上がらせ、パソコンデスクに向かうと電灯を点けてパソコンを起動させた。

画面に映るのはズラーツと並ぶ名前。

IS学園の生徒名簿だ。

以前にセシリアとの戦いの後に、ホストコンピュータをハッキングしたらIS学園の上層部やその国のコンピュータに被害を被る、というので学園のホームページに記載されている生徒名簿を見る事にしたのだ。

しかもこのホームページは、外部の人間にはアクセス出来ないという安全なもので、生徒ならいくらでも見ても良いという。

「あつた。鳳 鈴音。」

中国代表候補生で、専用機は近接格闘パワー型の甲龍^{シェンロン}……。

武装は青龍刀の”双天牙月”が二本に、衝撃砲の”龍砲”……」

「衝撃砲の龍砲は解りませんが、燃費にも重視していますから、長期戦になれば一夏は負けますね」

「確かに……」。

つて、シン。起きてたの？」

突然聞こえてきたシンの声に、キラは驚いたのか上擦った声を出す。

シンは少し不機嫌そうな表情をして答える。

「そりゃ、電灯の明かりにキータイピングの音、パソコンの駆動音にキラさんの眩きが聞こえたら嫌でも起きますよ」

「……………」

どうやらキラが知らず知らずの内に起こしてしまったらしい。

これなら、何処からどう見てもこれはキラに非がある。

「……………ゴメン」

「まあ、良いですよ。」

まだ消灯には早いですから、少し話でもしませんか？」

「そうだね」

その後、二人はこれからの事、一夏と鈴音の事、複数仕様技能の事、技術提供等を消灯時間ギリギリまで話し合った。

それから時が経ち、五月になったが、鈴音は露骨に一夏を避ける態度をまだ続けている。

一夏も一夏で解決させようとしているが、危険な何かに触れるのを恐れているのか中々話す事が出来なかった。

事情を知ったシンは、協力しようとしていたが、これは一夏の問題だから一夏が解決すべきで協力しないようにとキラに注意されたので出来なかった。

そして、クラス対抗戦のある週になったが、一夏の初戦の相手はいきなりの鈴音。

今のままではリンチ確定である。

今日もいつもの面子で一夏の特訓があるのだが、明日からはアーリーナの整備が行われるので、最後の特訓だ。

特訓と言っても、一夏が本番で100%の実力が出せるように、という事で一対一の模擬戦テストをするのだ。

第三アーリーナに向かっていく間、一夏がふいに思い出した事があっ

たよりに聞いてきた。

「そういえばさ、キラとシンのISの装甲って何で色が変わるんだ？」

「そういえば、そうだったな」

「何か意味でもあるんですの？」

「ああ、そういえば説明しなかつたっけ？」

オレ達の装甲はVPS装甲ヴァリアブルフェイスシフトって言うんだ」

「ヴァリアブル……」

「フェイス……」

「シフト装甲？」

聞いた事がありませんわね」

皆の反応も解る。

なんせ、VPSヴァリアブルフェイスソフトランスフェイスやPS、TPはこの世界にはまだ無い技術だからだ。

「まあ、皆の言っている意味も解るよ。

僕達のISは装甲に一定の電圧やシールドエネルギーを展開する事により、装甲強度を上げるんだ。

そうだね……。

実体弾や実体剣の一切の無効化したり電圧次第によってはセシリアの零距离レーザー一斉掃射にも耐えられる」

皆今度は驚愕の表情を見せる。

実体兵器の一切無効化、更に電圧次第でのレーザー兵器の耐性。これらが意味するのは、第二、第三が殆どを占める現行ISの攻撃が一切通用しない、という所だ。

そんなトンでもない装甲や、その技術が確立していたというのに驚いたが、それと同時に誰が二人のISを造ったのか気になった。

正直、”ストライクフリーダム”と”DESTINY”は、束でも造るのが不可能なんじゃないかと思える。

天候に左右されない世界初のビーム兵装を全身に持ち、装甲にシールドエネルギーを展開する事で実体兵器を一切無効化、レーザー兵器にも耐えうる強度になる装甲、一夏達は知らないが半永久のシールドエネルギーを産み出す超小型核エンジン、そして複数仕様技能と、あげればキリがない。

「なあ、二人のISって、一体誰が造ったんだ？」

「ああ、それは」

一夏からの質問、キラが答えながら第三アリーナのAピットの扉を開けた時だった。

「待ってたわよ一夏！！」

ポーン！！という銅鑼の音を背中に現れたのは、躍動的なサイドアップテールをした小柄な少女、凰 鈴音だ。

だが問題はそこじゃない。

ついこの間までめちゃくちゃ不機嫌な表情で一夏を避けていたのに、今はふふんと不敵な笑みを浮かべているのだ。

どういった心境なのか解らないが、これで少しは解決したのか？

「責様っ！

何故ここにいる!？」

「そうだ!

ここは関係者以外立入禁止だぞ!!！」

「あたしは一夏の関係者だから問題外よ。
むしろ部外者はあんた達よ」

鈴音の強気且つ理不尽な発言で筭とシンがキレかかるが、シンはキラに肩を叩かれて平静を取り戻した。

セシリアと一夏ははあ、と何度目か解らないため息を吐いている。

カオス（なのか？）な空間になったにも関わらず、張本人の鈴音は一夏に話しかけてきた。

「で、一夏。反省した？」

「嫌、お前が今まで避けてたし、納得がいかないまま謝る気にもなれんから」

「なあっ!？あんたまだなの!？」

「納得する内容じゃなきゃ無理だろうが!!」

余りにも理不尽な鈴音に一夏が遂に我慢が出来なくなったのか、怒声を上げる。

箒は箒で、

「むがああああ!!!!」

完全にキレて鈴音に襲い掛かろうとしたが、キラとシンにより抑えられ、どこからか出したのか太くて丈夫なロープで亀甲縛りと猿轡をされ、ジタバタと暴れていた。

勿論、一夏達は華麗にスルー。

「じ、じゃあこうしましょう!

クラス対抗戦で勝った方が負けた方に何でも一つ命令を出せるって言うので!」

「おう、良いぜ!

俺が勝ったら説明してもらおうからな!!」

「せ、説明は……その……」

「何だよ。止めるのか?」

「や、止める訳無いじゃない!

この馬鹿、朴念仁!!」

「うるさい、貧乳」

ドゴオオオンッッ!!!!!!!!!!!!!!

瞬間、何かを殴る激突音のような音がピット内に響き、ピットが揺れた。

鈴音がISを部分展開させて、壁を思いつ切り殴ったのだ。

特殊合金の壁が凹んでいる所から、近接格闘パワー型というのを物語っている。

一夏も一夏で、怒っていたので冷静な判断を失っていたので言ってしまったが、これではただの言い訳にしかない。

「い、今のは悪かった……………」

「今の『は』!?今の『も』よ!!」

何時だってあんたが悪いのよ!

もう良い!クラス対抗戦でぶちのめしてあげるから、首を洗って待ってなさい!!」

パシユン……………」

烈火のように怒り狂いながら、鈴音はAピットから出て行った。

「一夏。今のは……………」

「明らかにお前が悪いな……………」

「そうですね……」

「ムググ……」

四人からのお説教（一人以外）を受ける一夏。

今解っているのは、勝っても負けても謝るのは一夏だということだ。

戦いの狼煙（後書き）

前書きの通りですが、アンケートの期間を延長します。

切りは、8月21日の正午に伸ばします。

迫り来る恐怖（前書き）

アンケートに協力してくださった方々、誠にありがとうございます！

皆様が考えて下さった中で『あ、これが良い』と思ったのを出しますので、次回をお待ち下さい

迫り来る恐怖

クラス対抗戦当日の第三アリーナ。

既に観客席は、数多の女子生徒や関係者で満席になっており、アリーナに入り切らない生徒は、それぞれの部屋でモニター観戦をする形で、試合開始時間を今か今かと待ち侘びている。

その視線の先には、中世の騎士を模したような純白の装甲を纏った少年と、攻撃的なダークレッドの装甲を纏った少女が、それぞれの得物 エネルギー刃の刀身をした日本刀と特殊で巨大な青龍刀を右手や両手に握り、構えていた。

これから始まるのは、クラス対抗戦の第一回戦の第一試合、織斑一夏と凰 鈴音の試合である。

試合開始のブザーがまだ鳴らない静寂の中、いきなり鈴音が開放回線^{ネル}で話し掛けてきた。

「一夏。

今謝るんなら、手加減してあげるわよ?」

「雀の涙くらいだろ?」

「そんなんいらんから全力で来い」

これは強がりでも何でもない。

一夏にとつては、手を抜かれたり、手加減されたりされるのを最も嫌い、常に全力で事に当たる性分故である。

初めっから全力同士で戦うのは良いが、それでキラとシン（リミッター付き）、セシリアと箒に何回ボコられたかは明記しない。

「言つとくけど、ISの絶対防御も完全じゃないのよ？」

シールドエネルギーを越える攻撃力を持つ武装の攻撃なら直接本体や操縦者にダメージが与えられる」

これは脅しでも何でもない。

ISの装備には、直接操縦者にダメージを与えるためだけの装備も存在する。

勿論、競技規定違反だが世界各国がそれを守るとは到底思えない。

だが、『殺さない程度にいたぶる事は可能』という現実は変わらない。

前にキラと戦った時に一種だけだが良いところまで行ったのは、キラ自身がリミッターをかけた上に実力の半分も出していない事からだ。

簡単に言えば奇跡だ。

奇跡は二度続かない。

だが、今の一夏には鈴音に勝つ自信があった。

自分の覚悟と共に、キラとシンに鍛え上げられた実力を鈴音にぶつけて、それで終わると謝れば良いだけ、というのが一夏の心境だ。

鈴音の方は知らないが、恐らくは一夏を徹底的にいたぶるという心境だろう。

「では、試合を開始してください」

ピーッという試合開始の合図であるブザーが鳴ると同時に、二人は動いた。

「ガイイン!!」

”双天牙月”と”雪片式型”の刀身がぶつかり合い、鋼同士がぶつかる独特の金属音と共に激しい閃光が花を咲かせる。

だがそこはスピード型とパワー型の違いなのか、鈴音に一夏は押されていくが、一夏はキラとシン、セシリアと箒に教わった三次元躍動^{ツド・ターン}旋回を熟して鈴音を正面に捉えた。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない」

「生憎だが、無様に負ける気は更々無いんだよ。そうしたら、キラとシン、セシリアや箒、そして千冬姉まで侮辱する事になっちまうからな」

静かだが、覇気と覚悟に満ちた口上。

管制室で見ていた筈は、それだけで顔が真っ赤になったが今は試合中なので気付かない。

「ふーん。

あ、そうそう。」

あんたの”白式”の能力、見させて貰ったわ。

”雪片式型”のバリア無効果能力は確かに強力だわ。でもね　　」

言うや否や、鈴音は二本の”双天牙月”をバトンのように回転させながら縦横無尽に攻撃をしてきた。

「うおおっ!?!」

「何もさせなければ大した事は無いのよ!」

縦横斜めと、無数で複雑な斬撃に驚く一夏だが、何とか”雪片式型”の光の刀身で捌いたり紙一重で躲していく。

だが、それもいつまで保つかは解らない。

(くっ!)

ここは一度距離を取って様子見を……!)

焦った一夏は、何とか鈴音の斬撃を掻い潜り、刃が届かない所まで退避した。

「離れて様子見?

でも、その判断が命取りよ!」

パカッと肩のアンロック・ユニットのカバーが開き、中にある球体が光り始める。

（っ！）

この距離で武装を使うとなると、射撃武装だ！）

瞬時に、一夏の脳裏にキラとシンに投げかけた質問と回答が浮かび上がる。

その時は、ここ、第三アリーナにてクラス対抗戦に備えての勉強会だった。

『なあ。キラ、シン。』

二人って、射撃はどうやって躲したりしてるんだ？』

『射撃？そうだな。』

オレは目線や銃口の角度とかから読み取ってるな』

『目線と銃口？』

『そうだよ。』

人は目標とするものに対して、無意識に視線を向けるんだ。

更にその目標に向かって銃口を向けて射撃を放つんだから、そこから読み取れるんだ。

実はこれ、剣道でも使われてるんだ』

『剣道？

ああ、そういえばそうだったな』

一夏の意識が再び戻る。

まだ肩のアンロックユニットの球体が光っている所と身体に痛みが走ってない所から、まだ放たれていない。

（確か、目線を……）

ハイパーセンサーを駆使して、鈴音の目線を計算してみる。

見えた。

鈴音の目線は、明らかに一夏を捉えている。

ふと一夏は、反射的に機体を上昇させる。

ドゴオオンッ！！！！

すると、さっきまで一夏のいた場所に、何か不可視な拳が空間を切り裂いて、アリーナの地面を抉った。

「嘘！」

初見で龍砲を躲した!？」

焦りの声が鈴音の声から出る。

「行くぜ、鈴！」

本気で行くからな！」

「っ！」

調子に乗ってんじゃないわよ!!！」

焦る鈴音に対して、余裕をぶちかます一夏。

精神的にゆとりを持った方が勝つというが、この時の一夏と鈴音の状況は、まさにそうだった。

第三アリーナ管制室。

管制室には、教師である千冬と真耶がいたが、そこには生徒であるキラとシン、セシリアと篤がいた。

通常、管制室は関係者以外は立入禁止なのだが、もう既に何を言っても通用しそうにないので、暗黙の了解である。

途中で、鈴音の放った不可視の射撃に、箒が疑問に満ちた声を出す。
あの不可視の射撃”龍砲”はビームの軌跡も、またレール砲の放電すらない、構造的に不可能なので疑問を抱くのは仕方がないだろう。

「何だ……？あの武装は？」

「衝撃砲ですわね。」

空間に圧力をかけて砲身を形成し、また余剰圧力を砲弾として放つ武装です。

また、どこにも死角がないのも特徴の、わたくしの”ブルー・ティーズ”と同じ、第三世代の武装ですわ」

『どこにも死角がない』から話を聞かなくなった箒だが、隣で聞いたキラとシンは、セシリアの説明を聞いていた。

キラとシンの住んでいた世界のC・Eはそれなりに技術は発展しているが、ここは全く別方向に発展している。発展の度合いが桁違いな程に。

正直、此処まで発展を遂げると大きな戦争の一つや二つ、起きるだろうが起きなかったのは、正直奇跡の二文字だろう。

（何が目的なんだ……？

篠ノ之 束……）

本当に、何を考えているのか解らない。

突然ISを開発したり、世界を嘲笑したり、またこのような武装を

開発したり、また開発したらすぐに逃亡して行方不明になったりと、
端から見れば『変な大天才』と言いそうな事を平然とやっている。

はあ、とキラとシンはため息を吐き、強敵相手に互角以上に戦う一
夏を見遣る。心の隅に、何やら嫌な胸騒ぎを感じながら。

場所は戻り、第三アリーナ試合会場。

「ああ、もう！

ちよつとは止まんなさいよ！！」

「悪いがそいつは無理な相談だ」

焦りながら両肩の”龍砲”を交互にぶつ放し続ける鈴音に、一夏は
真顔で高速機動をしながら不可視の砲撃を身体を横に捻る事で躲し
つつつつコミ(?)を入れる。

あれから数分が経ったが、精神的にも、客観的にも一夏の方が優勢
だ。

鈴音の砲撃を躲し続けて、近付いたと思えばすれ違い様に斬撃を躲
し、また捌いていく。

実はこれ、”白式”ワンオフアヒリタイの単一仕様技能、”零落白夜”といつ使うべき
かと瞬時加速のチャージをイクニッション・ブースト図っているのだ。

「（チャージ完了まで、後5、4、3、2、1 0!）ほら、鈴
俺はここだ!」

「そこから動くんじゃないわよ!
今ぶっ飛ばしてあげるからね!」

動きが止まった一夏に向け、両肩の”龍砲”を最大値で放つべく、
チャージが始まる。

そこに、若干のタイムラグが生まれた。

「今だっ!」

そのタイムラグを狙い、一夏は瞬時加速を放った。

強力なGが襲うが、ISに搭載されている操縦者保護機能が、意識
がブラックアウトするのを防ぐ。

鈴音の驚愕に包まれた顔がどんどん近くなり、一夏は”零落白夜”
の刃を振るう。

だが、今にもその光刃が鈴音の装甲に当たりそうになった時だった。

バライイン!!

ズガアアン!!

上空にあるアリーナを保護する為のシールドが強力な光条によって
破壊され、地面に当たると、もくもくと黒い煙を出した。

異形来たる（前書き）

切りの良い所まで行きましたが、複数まで行きませんでした……。
（T・T）

異形来たる

「な、何だ!?
何が起きたんだ!?」

「解んないわよ!
いきなり空から降ってきたし……」

未だに治まらない黒い煙から、今度は二人に向けて幾つものビームが光の矢となつて襲い掛かる。

「うわっ!」

「きゃあ!」

その光の矢を、一夏は鈴音を横抱き（簡単に言えばお姫様抱っこ）にして躲すと未だ煙に包まれた敵を睨む。

その煙が払われると、そこには異形がいた。

黒い全身装甲を身に包み、首が無く、爪先よりも長い両腕。

しかも肩やら手先には砲口が覗いている。

はつきり言つてISなのか?と疑いたくなるモノだ。

「ビーム兵器……」。

「シールドを突き破る程の威力から見ればセシリアよりも出力が上だ」
「当たればただじゃ済まないわね……」。

つていうか離さないよ！」

「いてっ！…殴るなよ…」

豪雨のような連続パンチを受けて、一夏は鈴音を離す。

敵の前で緊張感がなさ過ぎる。

警告。所属不明ISにより、ロックされています。

「っ！鈴、来るぞっ！」

「ええ！」

愛機からの警告で、二人が離れると同時に、所属不明のISの両手から、桜色のビームが再び発射されて二人のいた空間を切り刻む。

「向こうはやる気満々のようだな…」。

鈴、行くぞ！援護してくれ！！」

「誰に向かってもものを言ってるのよ！」

けど良いわ、援護してあげ　　！！！」

「ダメです！」

織斑君！凰さん！

今すぐ脱出して下さい！」

先生達がすぐに敵ISを制圧しにかかります！」

恐らく二人の通信を聞いていたのか、真耶が二人に割り込む。

だが、その間はどうなる？

敵の目的やら目標やら知らないのに放置しては危険極まりない。それをしたら、師匠であるキラとシンからかなりきつい説教を貰うだろう。

下手をすれば殺される。

また、敵前逃亡は癪だ。

「いえ。

先生達が来るまで、俺達があいつを食い止めます」

「っ………そんな、危険で」

未だに彼等を止めようとする真耶からの通信を完全に切ると、一夏は鈴音の方に顔を向ける。

二人は迫り来るビームを紙一重で躲すと、そのまま所属不明ISに迫っていった。

「もしもし!？」

織斑君つ! 鳳さんつ!

聞こえますか!?! もしもし!?!」

「……落ち着け」

「ひゃん!?!」

慌てながら意味の無い行動の個人秘匿回線で叫ぶ事を続ける真耶に、
パアツチイイ!と千冬が物凄く痛そうなデコピンをして落ち着かせ
る。

()()(うわ、物凄く痛そう(ですわ)……)()()

「本人達がやると言ってるのだ。
やらせてやれ」

「織斑先生、なんて呑気な事をおっしゃるんですか!?!」

いきり立つ真耶を、千冬は軽く聞き流してコーヒーポットに向かう
とカップに黒い液体を注ぎ込む。

「まあ、待て。落ち着け。

コーヒーでも飲んで糖分を補給しろ」

「……織斑先生。それ、塩です」

「そんな馬鹿な。ヤマトも冗談が……って、確かに……」

キラから言われ、軽く聞き流そうとした千冬だが、自分が入れた粉の入れ物を見た途端、顔色が変わった。

そこに書いてあるのは砂糖 sugar ではなく、塩 salt だったからだ。

「って、何故塩がそこにあるんですか!？」

普通砂糖かミルクでしょ!？」

誰がそこに置いたんですか!？」

シンの痛烈なツッコミで、千冬の顔色がトマトのように赤くなる。

誰だかは知らないが、千冬も焦っているのだ。

「……もしかして一夏の事が心配なんですね。

だから」

「……………篠ノ之」

何とか話題を変えようとする筈だが、何か地の底から響く様な低い声に冷や汗を掻きまくる。

「お、織斑先生……………?」

「篠ノ之、飲め」

「い、嫌これ、塩が入って……………」

「何、塩が足りないだど？」

我が儘だな篠ノ之は。

仕方ないな」

言うや否や、千冬はドボドボツ！と大量の塩をコーヒーを入れた。もう最早それはコーヒーではなく真っ黒な飽和食塩湯だ。

「って、こんなの飲んだら確実に死にますよ!？」

「安心しろ。」

一口飲んだらすぐ楽になる」

「しれっと言わないで下さい!！」

ジリジリと迫る千冬に箒はキラとシン、セシリアに視線で助けを求めめる。

だが

キラとシンは二対一の戦いを真剣に見ていて、セシリアはオホホホと引き攣った笑みを浮かべて引いている。

「さあ、楽になるが良い」

「あ、ちよつ、まっ」

『嫌——————!——!』

断末魔が響き渡った。

暫く経って

後ろでピクピクしている気を失った筈をスルーして、全員は目の前の光学映像を真剣な表情で見ている。

「織斑先生！

わたくしにISの使用許可を

」

「セシリア。

今君が出撃していつでも足手纏いになるだけだ。

セシリアの機体は、一対多数用だから、複数に入ると返って邪魔になる」

焦るセシリアに、キラが諭す。

「キラさん……」

「そう、キラさんの言う通りだ。

友達として助けたいのは解るけど、今は二人が息を合わせて戦ってるから、今俺達が出ても二人にとってはマイナスになるだけだ」

「……解りましたわ……」

二人に諭されて落ち着きを取り戻したセシリアは、光学映像を見て、何かに気が付いた。

「あら……？」

何か一夏さんの目、変じゃありませんか？
それと、動きが鋭くなっていらっしやるような……」

「織斑の目……？」

山田先生、織斑の目をアップにしてくれ」

「あ、はい」

言われて真耶は、一夏の目をアップさせる。

一夏の目を見た全員（箒とキラシン以外）は驚愕の表情になった。

一夏の茶色の瞳には、ハイライトが消えており、それでいて動きがかなり鋭いのだ。

「……目覚めたか……」

「SEED……」

キラとシンがポツンと呟く声は、千冬の耳のみに入った……。

時は少し遡り、試合会場。

「ああ、もう！

何よこの火力と機動力は！！」

「焦るな、鈴！」

とにかく躲し続けて、隙を探すぞ！」

焦りの声を上げる鈴音と、その鈴音を諭す一夏。

この敵ISは、常人が出せるレベルを遥かに越えた動きや火力を見せ付けてくるのだ。

まだ学生である二人にとっては手に余る相手だ。

鈴音は代表候補生で、一夏はキラとシンの特訓を受けてはいるが、お互いまだ実力不足だ。

ふと、これまで一夏を狙っていたISが、鈴音に両手の砲口を向け、強力なビームを発射した。

「え……………?」

「……………鈴————!!!」

いきなり何の前触れも無く発射された光の矢に、動けない鈴音を庇うように一夏が鈴音の前に立ち塞がる。

「一夏！」

鈴音の声が耳に入るが、それは脳までに届かない。

今の一夏の心にあったのは、ただ鈴音を守る事、ただ一つだった。

その時、一夏の脳裏で何かが弾ける音がした。

全ての意識が、思考が、聴覚が、視覚が冴え渡る。

”白式”のエネルギー残量のみならず、”甲龍”のシールドエネルギー残量、敵ISが動く際の各関節部の音、単一仕様技能の”零落白夜”をどの辺で使うか、今どのくらいの生徒が逃げ出したか、何処に誰がいるのか、それら全部が聞こえ、解る。

そして、一夏と”白式”のコンディションが最高点になり、黄金の光が白い機体を纏う。

”零落白夜”使用可能の知らせだ。

「（何だよ、この感覚……！？
っ、ええい！^{まま}儘だ！）うおおお！！」

咆哮と共に、エネルギー無効の刃を大上段から一気に振り下ろす。

既にすぐ近くまで迫っていた桜色のビームは、エネルギー無効の効力を持つ青白い光刃にて一刀の元に両断された。

両断されたビームは、それぞれ空の彼方に消えるが、二人共それには一瞥もしない。

この感覚の正体は解らないが、今このままの状態だと勝てる気が一夏にあった。

「鈴！」

「……解ったわ！」

お互い声を掛け合い、それぞれバラバラに動く。

鈴音は”龍砲”で牽制してサポートし、一夏は流麗だが鋭い動きでビームを躲しつつ、すれ違い様に鋭い斬撃をしかけていく。

切り裂かれた身体で、もう動く事すらままならない筈だが、それでも身体を動かし藻掻く敵ISに、止めを刺そうと一夏が愛刀を掲げて刺突にかかる。

「うおおおお！」

脇構えに構えた光の刀身が、最後の”零落白夜”のバリア無効果の力を得て、絶大なる破壊力を秘めた刃が装甲を貫き通そうとした。

だが、光の刀身が今にも装甲の胴体に吸い込まれる直前。

いきなり上空から翡翠の光が無数に降って、一夏よりも先に敵ISの胴体 コア近く を射抜いた。

「うああっ!!！」

その衝撃により、一夏の身体は吹っ飛ばされ、”零落白夜”も、あの状態も全て解除になる。

「いつっ……」

「大丈夫!?一夏!」

「大丈夫だ……。
それよりも……」

いきなり敵ISを撃った相手を見て、一夏と鈴音はゾツとした。

10メートルはある黒い巨体、兜蟹カブトガニのような上部装甲に長大な砲身を装備、更に鳥の脚の様な脚部をした相手。

それよりも背筋を凍らせたのは、余りにも禍禍まがまがしい威圧感を放っている所だ。

『戦略装脚兵装要塞』、『破壊の黒き悪魔』の異名を持つ、”GEAS-X01デストロイ”。

一夏達が住む世界には無い、『この世にあってはならない兵器』だ。

「な、何よ、あれ……。」

IS、なの……?」

「知るかよ……」

二人が呟く中、二人に個人秘匿回線が開かれる。

響くのは、一夏が良く知る青年の声。

『一夏、鳳さん！

今からそこから退くんのだ！』

「えっ!？」

何でだよ、キラー!」

『今そいつに立ち向かったらただじゃ済まない!』

「でも、あたし達があいつを止めないと……」

『……死にたいのか?』

「っつ!」

キラからの殺気を籠めた注意に、二人はゾツと背筋が寒くなる。

今のキラは、学生ではなく一人の戦士としてのキラだ。

『……とにかく、二人のシールドエネルギー、特に一夏が危ういから、速く退け!』

Aピットが最も速く解析される!』

今度はシンからの注意に、二人は顔を見合わせ、頷くとAピットに向けて撤退していった。

大天使と墮天使の剣舞（前書き）

うぎゃあぁー!!

DESTROYの大きさですが小さくしました

大天使と墮天使の剣舞

一夏と鈴音の二人がAピットに入るとISを解除し、管制室のガラ
ス越しにいるキラとシンに歩みを進めた。

「キラ、シン！」

あいつは一体何者なんだよ!？」

「そうよ！」

何なのよ、あいつは!？」

あんなにでかくて威圧感バリバリじゃない!！」

いきり立つ二人に、キラは静かに沈める。

「今は詳しく言えないけど、一言。

あれは、『この世にあつてはならない兵器』……」

「『この世にあつては』……」

「『ならない兵器』……?」

どういう意味よ!？」

「時間が無いから簡単に言つと人を、人の道から大いに外れた兵器
だという事だ」

「そういう事。

行こう、シン！」

「はい！キラさ」

「ダメです！

ヤマト君、アスカ君！」

「っ！？」

キラとシンがピットに出てISを纏おうとした時、いきなり聞こえてきた真耶の威厳の籠った声に、キラとシンは思わず脚を止める。

「今先生方があの巨大ISを制圧しにかりに行ってます！

ヤマト君達が出る必要は」

「行こう、シン」

「はい」

「行くなっ！

ヤマトッ！！アスカッ！！」

今度は千冬の声が聞こえるが、二人は構わずに愛機を装着し、カタパルトに脚部を固定せずに浮き上がる。

千冬も、あれが一体何なのかが千冬なりに理解出来たらしい。

そして今は自分の教え子である彼等が、自分から死地に行こうとしているのも。

だが当の二人はもうここで議論をする気はない、とでも言うように強制的に回線を切り、リミッター解除の証であるガンダムフェイス

の装甲を顔面に展開する。

そして、二人の脳裏で何か弾ける衝動と共に、装甲に隠された瞳のハイライトが消え、意識と視覚、聴覚と思考が全てが鮮明に冴え渡る。

これまで幾度も救われた”SEED覚醒”だ。

同時に装甲からキラは深蒼のオーラと粒子を、シンは真紅のオーラと粒子を放出する。

それだけではない。キラ”ストライクフリーダム”の左腕と左肩にアンカー”パンツァーアイゼン”やビームブーメラン”マイダスメツサー”が、更に右手にデステイニーの”アロンドイト”と酷似した水色の長大なレーザー対艦刀”シュベルトゲベール”が現れたのだ。

一方でシン”デステイニー”の背中にある”高エネルギー長射程ビーム砲”の砲身が形を変え、”アロンドイト”と同型のレーザー対艦刀になり、四肢が純白に染まり、胴体はシンの瞳の様な真紅に染まる。嘗てキラとシンが操った”ストライク”と”インパルス”。

その換装システムの一つであり。

「ブーロウオファビリティ複数仕様技能、”SEED覚醒”、”ストライカーシステム、ソードストライカー”装備完了。
キラ・ヤマト。

”フリーダム”、行きます！」

「ブーロウオファビリティ複数仕様技能、”SEED覚醒”、”インパルスシステム、ソー

ドシルエツト”装備完了。

シン・アスカ。

”デステイニー”、行きます!”

二人は、カタパルトに脚を固定させずにそのままアリーナの方へと射出されていった。

「……後である二人は厳罰だな」

はあ、とため息を吐く千冬だが、気になる事がある。

第一夏が使っていた、またキラとシンが知っていて、また使っているあの”SEED”の事。

(今日から忙しくなりそうだな……)。

今日は仕事が終わったらビールでも飲むか……)

いつも飲んでいのではないのか?とツツコミを入れたくなるが、それは千冬が内心思っている事なので誰も言わない。

はあ、とまたしてもため息を吐く。

今日も千冬は苦労人だった。

一方、キラとシンは”デストロイ”のかなり上で滞空していた。

”デストロイ”は、未だにモビルアーマー形態のままでももして来ない。

ただそこに浮かんでいるだけだ。

「キラさん。お願いします」

「解った」

頷くと、キラは胸部砲口カイドゥスから”デストロイ”に向け、真紅のプラズマビームを放つ。

すると、黒い装甲にぶつかる前に、虹色の光の膜が張られ、ビームを弾き飛ばした。

「やっぱり、陽電子リフレクターを装備している……」

陽電子リフレクター。

戦艦の陽電子砲までも無効にさせる、鉄壁の楯。

そして、その陽電子リフレクターを解除すると目の部分が不気味に光り、

ガシャン！

という音と共に砲台がキラとシンに向けられ、砲口に光が集まる。

主武装の一つ、”アウフプラール・ドライツェーン”。

その威力は、モビルスーツの状態ではたった一発で遙か遠くに離れた都市を廃墟にさせる程だ。

ISの状態である今ではどれ程かは解らないが、それでも危険、だというのが解る。

理論ではなく、本能がそう言っている。

「行くよ、シン。」

あれは、この世界にはあつてはならない物。

ここが何処であれ、今がどのような時代であれ、絶対に使わせてはならない」

「解ってます。

ここで、完全に

キラとシン、蒼き翼と波動、紅き光の翼と波動をその背に抱き、放つ大天使と墮天使は、それぞれ右手と両手に握ったレーザー対艦刀を携え。

「叩き潰す!!!」

叫ぶと同時に、機体が急上昇させた。

二人がさっきまでいた空間が、二本の真紅のビームが切り裂き、空の彼方にまで消えていく。

そしてそれと同時に四基のブースターが噴き、黒い巨体をふわりと浮き上がらせ、二機を追い始める。

「やる気みたいだね……。」

行くよ!」

「はい!」

三振りのレーザー対艦刀、その名の通り戦艦すら斬り裂く強度と切れ味を持った長刀を携え、真っ直ぐ向かっていった。

Aピット管制室

一方で、キラとシンが出陣していった管制室は、復活した筈も交えて行く行かせないの大論争が起きていた。

「先生!

わたくしにISの使用許可を下さいまし!」

「千冬姉!

俺にも使用許可をくれ!

二人の援護に出る!」!」

「甲龍のエネルギーもバッチリです!

あたしにも下さい!」

「私にも打鉄の使用許可を下さい！」

「ダメだ。」

オルコットの”ブルー・ティアーズ”は一对多向きで、お前が複数側に入ると寧ろ邪魔になる。

織斑の”白式”はまだエネルギーがまだ半分も回復していない。

鳳の甲龍に装備してある”龍砲”は返つてあいつらを窮地に追いやる。

”打鉄”は使用申請に時間が掛かるから駄目だ。

行った所であいつらの足手纏いになるだけだ。

それと織斑。織斑先生だ」

バゴツ！！

「あだっ！」

喧騒の中で、千冬から頭を思いつ切り叩かれる一夏。

だが解った事がある。

今の自分達では何もどうする事も出来ない。という事だ。

友達が危ない目に逢ってるのに、ここで指を啜えて見ている事しか出来ない、と言われていているようで腹が立った。

「それに、いつの間にか全てのピットが閉じられている。

それもそれなりにレベルが高いプロテクトだ。

並の奴では解析するのにかなり時間が掛かる。

だが外に出る扉の方のみプロテクトが外されていて、掛かっていない」

この事実が現す事、それは。

「ここはキラとシンに任せて俺達はその間に逃げろって事か……」

「……………」

弟からの独白を、無言で頷く千冬。

「くそつたれが……！」

余りに無力な自分に耐える事が出来なくなったのか、一夏はそのままAピット発進口に向かおうとするが、ガシツと千冬に肩を掴まれた。

「……………二人を援護する気か？」

「……………当たり前です」

怒りと悔しさが混じった声が、一夏の口から漏れ出る。

鈴音も、箒も、真耶もまた一夏の声と同じような表情をしている。

「だが行ったら、あいつらの思いが全て無駄になる。

辛いのは解るが、ここはあいつらを信じる」

千冬もまた、一夏と同じような声で諭す。

千冬も一夏と同じ思いだが、それ以上に異世界の軍人とは言え、今は自分の教え子である彼等に対して何も出来ない無力な自分が悔し

く、また腹立たしいのだ。

「……解りました」

唯一の肉親であり、教師でもある姉に諭され、また思いを組んだ一夏はその力を抜き、強い光を宿した目を巨大な敵を相手に一步も退かないキラとシンに向けた。

一方、第三アリーナの上空。

「キラさん！」

「

任せて！」

シン、右からミサイル攻撃！」

”デストロイ”の攻撃を易々と躲し続け、反撃を行っていた。

両手は分離して小型戦闘機のように飛び交いながら二人に十本のビームで攻撃してきたが、キラの対艦刀シユヘルトゲベルにより一刀両断され、砲身もまたミサイルを発射した後に、頭部バルカンにより起こった爆煙の隙に根元にあるエネルギーデバイスを、”アンビデクストラス・フォーム”となったシンの対艦刀アロンタイトの一刀の下に両断され、また上部円盤

は三つのビームブーメランによりズタズタ、周りにあるビーム発射
デバイスは発射不能という状態だった。

対して二人の状態は全くの無傷。ノーダメージ

戦いとは呼べない一方的な破壊だ。

ふと、“デストロイ”の目が禍禍しい光を出し、不気味な唸り声を
上げ、その姿を変えた。

脚部は半回転し、ズタズタな円盤は背部にスライドする事で、鈍く
輝く双眸とキラとシンの愛機に酷似しているVアンテナが露わにな
る。

”デストロイ”、モビルスーツモードだ。

モビルスーツとなった”デストロイ”がアリーナの地面に降りると
同時に胸部にある三つの砲口と口に、白い光が集まる。

”スーパースキュラ”だ。

放たれば間違いなく絶対防御を破壊するだろうが、キラとシンは
動かない。

「とどめだ」

「…………ステラ、マユ…………」

…………オレは、あいつを破壊する…………。

星の向こうから見ててくれ……………!!」

敢えてあの世とは言わない所は、シンらしいといえばシンらしい。

同時に、シンは”アロндаイト”の一本を背中に納め、青眼に構えると光の翼を広げる。

「……………うおおおー！ー！ー！」

「ハアアアアアー！ー！ー！」

キラとシンはそのままの勢いで加速し、シンは真っ直ぐ臨界寸前の砲口を貫き、キラは他の砲口を抉ると真っ直ぐ腹部を貫いた。

貫かれた腹部と胸部砲口から紅蓮の炎が吹き出て、黒い巨体が仰向けに倒れ、残された口から真紅のビームが叫び声のように放たれる。

その光景は、奇しくも地球連合軍、第81ファントムペイン独立機動群によるベルリン大虐殺と重なった。

爆発していく”デストロイ”に、シンは表情を曇らせる。

あの時、”デストロイ”を操縦していた大切な人であるステラ・ルーシェが、今自分が上官と慕い、また背中を任せられるキラ・ヤマトに殺されたのだ。

「シン……………」

「はい……………」

装甲に包まれた肩を叩く感触に、シンは軽く頷く。

キラとアスランを始めとした先輩方から、もう過去に囚われないと決めた。

過去の事は確かに大事だが、そればかりを見てシンは危うく未来までも殺しそうになったからだ。

二人は対艦刀の装備と蒼紅の光とオーラを消し、Aピットに向かっていた。

「何か言いたい事はあるか？」

「……いえ、ありません……」

Aピットに着いた二人だが、早速鬼神のような表情を浮かべ、背中から黒いオーラを放つ織斑姉弟、鈴音、箒、真耶を目の前に冷や汗を掻きながらでかいたんこぶが出来た頭を下げていた。

結局アリーナはデストロイが倒れ、爆発した衝撃で半壊、地面はもう平な部分が見つからなく、観客席ギャラリーも見る影がもう余りないという有様だった。

因みに、たんこぶが出来たのはISを解除した瞬間に千冬から思いっ切りげんこつを喰らったからである。

箒に至っては何処からか出したのか、日本刀を携えている。

軍人である二人にとっては一般人に怒られるのは余り怖くはないが、

何故かこの時はそんな気はしなかった。

「全く、教師の許可を貰わずに出撃、正体不明の敵を完膚なきにまでズタズタ、更にアリーナをこんなにしてくれた。これ程なまでの馬鹿者は正直見た事はないぞ」

千冬からの注意に、更に身体が縮こまる二人。

「まあ、そのお陰でこのくらいの被害になったからな。そこは礼を言っておこう」

千冬からの賞賛にも、二人は顔を上げない。

言ったとしても、千冬は恐らく嫌がるだろうから言わないだけである。

「それから、後で来て貰いたい所がある。後で職員室に來い」

「……はい」

二人の顔を見ずに千冬は真耶を連れ、その場から去っていった。

「さて、次は俺だ」

「その次は私だ」

「じゃ、最後はあたしね」

「……」

次は一夏、篤、鈴音が二人の目の前に現れ、くどくどとお説教を始めた。

キラとシンはまだまだその場から離れられそうに無かった。

数時間後、最高機密室。

三人からくどくどとお説教を終えた二人は、職員室で丁度仕事を終わらせていた千冬と真耶に連れられて、学園地下50メートルにある一般には知られていない『LEVEL4』と書かれた最高機密室にいた。

因みにここ、キラとシンの専用機である”ストライクフリーダム”と”デステイニー”が調べられた場所でもある。

中央にあるテーブルには、一夏を襲った無人ISと、デストロイの動力部の一部が置いてあった。

「山田先生。何か解ったか？」

「いえ、解ったのはこの二つのISのコアは何処の国家にも所属していないコアくらいです」

「……そうか」

これで解ったのは、この二機のISは世界にある467機以外のコアを使っている所だ。

しかし、独立稼働式や遠隔操作システムは、何処の国家でもまだその企画書にも至っていない。

だが国家ではなく、個人で考えれば自ずとその人物が特定出来る。

「シン……」

「はい。」

送ってきたのは間違いなく……」

「篠ノ之 束……」

因みにこのやり取りは千冬や真耶には聞こえていないし、また知らない。

なんせこれは二人のアイコンタクトなのだから。

「質問の前に言うぞ。」

今回ここで見聞きした物は決して口外するな」

千冬からの釘に、二人は無言で頷くと、千冬は質問を始めた。

「お前達に来てもらったのはいくつか質問があるからだ。
あの黒くてでかい化け物は、お前達は知っているな？
その知っているのを全て吐いて貰う」

千冬の高圧的な態度に二人は内心舌打ちをしながらも頷くと説明を始める。

「……戦略装脚兵装要塞”GFAS-X1デストロイ”……。
僕達の住んでいたC・E・の世界にあつた軍部勢力、地球連合軍が所持していた悪魔の兵器です」

「”デストロイ”……。
確かにその名の通り破壊する事しか出来ないな」

「はい……」

「更に、この機体を動かすのは普通の人間には出来ません」

「何？それはどういう事だ」

「それは、言えません」

はぐらかすシンだが、正直答える気は無かつた。

普通のパイロットなら動かす事は出来ない。

なら、特殊な訓練と任務を受け持った地球連合軍の軍人なら、その性能を100パーセント引き出す事が出来る。

だが、その人間は酷く非人道的な”ブルーコスモス”、”ロゴスの兵器^{パーツ}として短い一生を終えてしまう。

それを言った所で何がどうなる？

何も変わらないのがオチだ。

「そうか。」

なら、深くは問わん。

次の質問だ。

あの鋭くなつた織斑の目を見た時に言った、SEEDとは一体なんだ？」

「SEED……。」

種、という意味で訳をしても良いんですか？」

やはり来た質問だが、答えない訳には行かない。

日本語訳で確かにSEEDは種を意味するが、全く違う。

「確かに直訳するとSEEDは種を意味しますが、違います。

正式名称は、”Superior Evolutionary Element Destined-factor”。

”優れた種への進化の要素である事を運命付けられた因子”の頭文字から取り、SEEDと言います」

「優れた種への進化の要素である事を運命付けられた因子……………」

千冬が驚愕に彩られた声を出し、真耶も頭の中でそれを考えてみる。

自分の弟の事を全て知っていたと思っていた彼女だからか、知ればついて行くにも時間が掛かる。

千冬はそのSEEDになつた事がないのでSEEDに選ばれた一夏がどういった心境だったのかが解らない、というのが本音である。

「その、SEEDを発動させたら、どうなるんですか？」

「SEED覚醒を行うと、視覚や聴覚、直感を始めとした感覚や戦闘能力、指揮能力、更には脳内演算能力等が爆発的に上昇します」

驚く千冬と真耶の二人だが、キラとシンはもう話は終わりと言う風に背中を向け、歩みを進めるが……。

ガシィツ！

「待て。」

まだ質問が終わっていない」

その二人の肩をガシィツと強く掴む千冬の手。

(やっぱりあれか……………)

「まだ聞く事がある。」

お前達のあの能力は何だ？

パイロウオラアヒリテイー
複数仕様技能と言っていたからそこから……………」

「複数仕様技能、と言うのはその名の通り、本来一つの機体に一つしかない単一仕様技能が複数存在するものです」

キラとシンはそれだけ言うと、肩から千冬の手を離してその部屋から出て行った。

大天使と墮天使の剣舞（後書き）

いつの間にか40万PV越してた……（＾－＾；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976u/>

IS インフィニットストラトス 自由の大天使 運命の墮天使

2011年9月30日10時21分発行